
風都紅塵戦奇譚 一．始まりの風

秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風都紅塵戦奇譚　－・始まりの風

【NZコード】

N9102D

【作者名】

秀

【あらすじ】

沙漠を一人旅する嵐。^{ラン} 沙漠の外縁の街・禾峯^{カホウロ}露に逗留中、大量発生した蝙蝠によって、白昼人間が襲われるという事件に遭遇。そこで出会った絶世の美貌を持つ女戦士・紅珠^{カワジコ}と協力して事件を解決する。・・・・・ オリジナルファンタジー小説。歴史好き、古代史好き、神話好き、オカルト・ミステリー好きの作者による、色々な要素の詰め込まれまくった話です。

1・蒼穹と紅土

蒼穹を鷹が舞う。ただ一羽、その雄姿を遙か地上に見せつけるかの如く。

縁少なく砂埃舞う大地の只中で、それを見上げる影が一つ。砂を避ける為に大分薄汚れた布で頭髪と首もとを覆い、靴の上から膝までの部分もぎつちりと布を巻きつけているその姿は典型的な砂漠の旅人のものである。肩にはさほど大きくない行李を背負い、手には一本の杖のみを握っていた。

彼は目深に被つた布を押し上げながら、天に目をやつた。

「おぬしらはいいのう…自由に飛べる翼があつて…」

誰にともなく呴かれた言葉は、その口調とは裏腹にまだ若い男のものであつた。砂漠の旅装に小柄な身を包んだその男は、背の荷物を一つ揺すり上げると、遙か地平線に目を落とす。砂埃の舞う視界は黄色く染まっていた。その中に僅かにくすんだ縁が点在し、さらにその向こうに黄褐色の塊が霞んで見える。

「…とにかく日が暮れるまでにはあそこに辿り着かんと、わしは干乾になつてしまつのう」

確かめるまでもなく、腰から吊るした水袋の中身がもう僅かしかないのを、彼は知つていた。食料はまだあるが、水分もなくこの荒野で夜を明かすなどということは、自殺行為に他ならない。

「なにはともあれ、水と…あとは乗騎が欲しいのう」

そう呴くと、彼は布で覆つた口元を僅かに歪めた。翠の瞳もおかげに細められる。

「まだまだ始まつたばかりではないか…事を急いても仕方ないといふにこり」

自嘲げな言葉だが、その響きは決して暗くはなかつた。むしろこれから始まることへの期待感に逸る気持ちを押さえつけようとするもののようにあつた。

「さて、少し急ぐか」

視線の先にはやや傾いた太陽があつた。赤味を増したその光が周囲を仄かに紅く染め始めている。彼は翠の瞳を再び天に向けた。そこにはただ蒼天が広がっているのみであった。

彼の名は嵐。^{ラン}後に天下にその名を余すことなく知られることになる彼も、今この時点ではまだ一人の旅人にすぎなかつた。

禾峯露カホウロの街は砂漠の外縁に造られた街であった。

砂漠といつてもこの辺りの地形は北と南に峻険な山が迫り、その囲まれた部分に水の少ない高地が広がる、どちらかといえば岩沙漠と呼ばれるものであつた。北と南の山の頂は常に雲に覆われ、その全容すら望めないほどであつたが、対してその間の高地は却つて山に水を取られ、枯れた土地となつていたのである。そのような地形であつたため、人の住む所は山の麓につくられることとなる。結果、沙漠をぐるりと囲むように街ができ、その間の行路は商人や様々な物資・情報の行き交う通商路として発展するようになつていた。

この沙漠地帯の東と西は、豊かで広い平地が広がつており、大きな都が繁栄していた。砂漠の通商路はその間にあつて、人や文物、情報など、様々な文化を繋ぐ橋となつていたのである。当然その間の村や街には多種多様な文化が雜多に入り乱れ、様々な人種が行き交い、生活していた。東の都はやや北寄りに首都を構えていたため、砂漠の通商路は北の方がやや重視されていた。対して南は海からも近く、商人や個人の旅人が主に利用していたのである。また砂漠を抜けた西側では、西の都の他に、南に一大商業都市があつた。そのため、砂漠の西の縁では北も南も同等に賑わつていた。

その中にあつて禾峯露の街は砂漠の南西の小さな街として、主に商人や旅人の休憩地としてそこそこの賑わいを見せていた。街の中央を貫く通りの両側には旅人相手の宿や商店が並び、また建物の影では筵を広げて商売をする旅人などもいた。通りの喧騒を一步離れると、山へ向かつて階段状に畠が作られ、さらにその上には家畜の放牧場などもあり、細々と生活が営まれていた。

その日、日が暮れて半刻ほどしてようやく禾峯露の街についた嵐は、とりあえず最も値段の安い宿を探して泊まることにした。旅費はさほどたくさん持つているわけではなかつたし、更にこれから先

も長い旅になることが分かりきっていたため、なるべく出費は抑えねばならなかつたのである。

(我ながらち臭いのう…)

多少情けなくはあつたが、贅沢は言つていられない。嵐は小さな銅貨一枚で一泊の宿と一食を出してくれるといつ、それでもこのような宿としては破格にいい条件の宿の一室で旅装を解き、ほつと一息ついた。破格の値段の条件は共有の大部屋ということであった。嵐が入つたときには既に20人近くがその部屋にいた。誰も彼も砂漠の旅人らしく、よく日に焼けた顔と砂まみれの荷物を持っていた。当然男の多い部屋の中で、嵐はしさか場違ひなものを見た。

おそらく今夜最後の客となるであろう嵐は、入り口付近にしか居場所がなかつたためその辺りに旅装を解いたのだが、そのちょうど反対側、やや大きな窓のある壁側の一角に、それはいた。夜の灯火のもとでもそれとわかるほど美しい艶のある長い髪がまず目を惹く、細身の人物。顔の造作の細かいところまで分かるはずもなかつたが、一目で女だといふことが　しかもどびきり容姿のいい　分かる。

当然大部屋は男ばかりいるわけではない。家族連れで一緒に泊まつているものもいるので、何人か女子供もこの部屋にはいた。しかしどうみても「女一人」でこの部屋にいるのは、彼女だけであつた。無防備なのか、よほど豪胆なのか、それともただ何も考えていないだけなのか

(なんなんだ、あの女は)

興味を持つというよりも半ば呆れて、嵐はその女を見ていた。女はそんな嵐の視線も、周囲の関心も全く意に介していないようで、壁に凭れてじつと目を閉じていた。

情報を求めるならば町を歩くこと。これは何処の場所でも同じことである。例えどんなに情報規制がしかれていたとしても、人の口

に完全に封をすることは不可能なのである。特に市、酒場、宿屋などは情報の宝庫と言つてもよい。そのような場所にはしばしば情報屋などもいるものである。

一夜明けて翌朝、嵐は市の人波の中にいた。禾峯露は砂漠の入り口に程近い街であるため、長居する旅人は少なかつたが、人の入れ替わりは早く、物資も豊富であった。人も物も入れ替わりが早いということは、情報もまた最新のものが揃いやすいということである。位置柄、西の大國バルジャや南の商業都市カジヤルのものが多いが、それと同程度には東の情報も入つてくる。その中でも最も多いのはやはり東の大國、吐蕃のものであつた。

吐蕃は大陸の東一帯に勢力を持つ皇国である。東は起伏にござしい地形で、南と東は海に面している。北は寒冷な土地で、なだらかな山地を隔てて草原と森が広がっていた。ただし農耕には向かない土地柄で、気候も極端に変化する。従つて定住するには向かない土地ということになる。そのためか、東や南には強大な勢力を誇る吐蕃も北にはさほど力を持たない。南は温暖湿潤で土地が非常に肥えている。また広い河川も多い。東は良港に恵まれていて、海上通商路の一方の終点でもあり、海の恵みの恩恵にも与つていた。自然、支配の中枢はその方面に向いてしまう。事実、先代の皇帝のときには都は南東の大河沿いにおかれていた。それが現在の都である大都に移つたのは、現皇帝の代になつてからである。

「大都：つといえ北の大河の側の町であろう？かなり吐蕃の勢力ぎりぎりの辺りではないか。何故今更皇^{オウ}はそのような場所へ遷都したのだ？」

通りの外れで数匹の山羊を繋いだ荷車の番をしている老人と話しこんでいた嵐が、首を傾げてみせた。

「さあのう、そんなことまではわしには分からんよ。ただ、昔はいざ知らず、現在の大都は北辺の町とはいえ、さほど不便でも辺鄙な場所でもないということじや。何しろ先皇^{センオウ}の御代に水上交通網が完成しておるからう」

「物資も人も運河を伝つて幾らでも入つてくる、といふわけか」

立て膝の上に頬杖をついて、嵐が頷く。

「それにのつ…これはあまり都では声を大にして言えんことなんじやが…」

誰が聞き耳を立てているわけでもないのに、老人が声を潜めて嵐の方に身を屈めてきた。嵐もつい耳をそばだてるようにして老人を見る。

「皇は先皇を嫌つておられるのだそうな。よくしたもので先皇も皇をあまり好いておられぬらしいが。じゃから皇位を繼いですぐには皇は都を北に移したというのが本当のことらしいぞ。なるべく先皇の跡のないところにいたい、といつことじやの。そこで新たな都を造つておるのじや」

「都を造つておるのか」

「そうじや、…おぬし、知らんのか？そのため今各地から人手と物資がかき集められておるんじやよ。各公国ごとに供出額まで決められてのつ。どこも大騒ぎじやよ」

「でもある意味、賑わつていていいのではないか？いつだつて新たなものをつくるのは人を沸き立たせるものだからな」嵐の言葉に、しかし老人はかぶり頭を振つてみせた。

「ついてこの間運河を造るという大事業が終わつたばかりじや。その上、今まで見たこともないほど大きな都を、しかも二つも造るなど、わしらにとつては迷惑でしかないよ」

「二つ…？」

溜息をついた老人の言葉に、嵐が眉根を寄せて反問する。

「ああ、わしもよう知らんのじやが…そういう噂じや。なんでも各地から集められた労働力が一ヶ所に振り分けられて送られているのだそくな」

「いっぺんに二つの都を造る…なんでそんなことを皇は…」

「さあのう。所詮は雲の上の御方。わしらのよつた凡人には皇の御考えなぞ分かるわけがないよ」

深い息と共にそう呟いて、老人はすっかり灰になつた煙管を吸い、眉をしかめた。嵐は老人が地面に灰を落とすのを見るとはなしに見つめながらなにやら考え込んでいた。

「……おお、そうじや。で、なんじゃつたかいのう。馬が欲しいと言つておつたか、おぬし」

思い出したように老人が顔を上げた。難しい顔をしていた嵐もふと表情を変えて老人を見た。

「おお、そうそう。砂漠の旅に向いた馬が欲しいのだが……見たところおぬし、北の遊牧民であろう？馬を手に入れるあてなど知らんかのう」「う」

嵐の言葉に老人が皺深い顔の中で細い目を見開いた。

「ほう、おぬしよう分かつたのう。何故わしを北の者と知った？」確かに老人の様子を見れば旅慣れた者だということは分かる。顔こそ深い皺が刻まれ、古いの様子は隠し様もないが、その日に焼けた肌色や細身ながらも頑丈な体付き。そして身につけた装備や荷物も長旅のためにあつらえられたものばかりである。しかし老人の服装は基本的に吐蕃の一般的な庶民のものであり、それに多少手を入れている程度であつた。老人は特に民族的な衣裳を纏つているわけではなかつたのである。

対する嵐の返答には特に気負つたものはなかつた。

「ああ、ただなんとなくそう思つただけだが……強いて言うならおぬしのその髪。布を巻いておるからはつきりとは見えんがかなり短くしておるであろう？それは吐蕃の人間としてはあまり一般的ではないからな。それからおぬしが連れておる山羊。あれはかなり小柄で毛の質の良い種だ。あれは一般的に遠く北の山岳地帯の野生種に近いものだ。大分改良が加えられてはおるようだが……まあ、そんなところで北の方から來たものと判断したのだが……」

何か不都合でもあつたか？と続けた嵐を老人はまじまじと見つめ、それから白い歯を見せて笑い出した。

「いや、たいしたもんじや。それだけでようわしを北のもんじやと

見抜いたものよ」

「いや、深く考えて言つたわけではないのだがな…」

「勘にしても嬉しいものよ。たいした観察眼じや。そのくせ妙に世事には疎いようじやし。おぬし、面白い奴じやのう。」

老人の皺の深く刻まれた浅黒い顔は一見いかめしいが、笑うと妙に温厚な、親しみやすいものになった。おそらくそれが彼の本来の性質なのであらう、と嵐は思つた。

「そうそう、それで馬のことじやが…すまん、わしは確かに遊牧の民じやが馬は扱つておらんのよ。もつぱら羊と山羊と共に歩くものでのう…馬は移動用のみでわしらにとつても貴重品での。他人に分けてやれるものはないんじや」

すまんことじやが、と言う老人に、嵐はあつさりと頭を振つてみせた。

「いや、気にすることはない。また他をあたるや…それよりも山羊や羊を扱つておるということは、乳製品も扱つておるということか？」

嵐の問いに、老人は頷いた。乾し肉や毛糸と共に乳を固めた保存食であるチーズも扱つてゐる、と聞いた嵐は、多少の交渉の末、チーズを一袋手に入れた。

老人に別れを告げた嵐は、ぶらぶらとした足取りで通りに向かい、人込みの中に消えていった。

3・『棗の木』

その日はよく晴れて風も穏やかな日であった。通りをゆく人も日よけ程度の被り物の軽装の人多かつた。背に行李を背負つて歩いている嵐も、赤茶けた癖つ毛をさらして、袖や裾の解放された軽装でその中にいた。

通りを行き交う人波の中にあつて嵐は、ひとことで言うなら目立たない存在であつた。何よりも背丈が大抵の成人男子よりも頭一つぶんほど低い。無論、砂漠の旅がかなりの難路であることを考えれば、ここに集う人間は並の人間よりも屈強な体格と強靭な精神力をもつた逞しい人間であることは当然のことであるので、嵐が格別に貧相だという証拠にはならない。しかしそれでも嵐の背丈が平均値よりも少し低く、逞しさからは程遠い体つきをしていたのは事実であつた。

そんなわけでのんびりした表情でのんびりと通りを歩いている嵐ではあつたが、この人通りの多い街路を歩くのはけつこう大変なことであつた。むしろ人波を抜けてさつさと歩くほうが楽であつたろうが、それでは情報が全く耳に入らない。とにかく今は何よりも少しでも多くの情報を手に入れたい嵐としては、苦労をしてでものんびり歩く必要があつたのである。

人々の会話に耳を傾け、時には会話に参加しつつ、旅に必要なものを行い揃える。そうしていふうちに嵐は街の中心にある酒場に辿り着いた。

重い両開きの分厚い木でできた扉を押し開けて中に入ると、まだ早い時間にも関わらず薄暗い店内には既に相当な人数の客がたむろしていた。扉を開けた正面がカウンターになつていて、左右の奥に卓と椅子が配置してある。カウンターの奥には階段があり、吹き抜けの一階には幾つかの扉が並んでいる。典型的な旅人の宿、といったところであった。

「いらっしゃい！」

カウンターの向こうででっぷりと太った男が愛想のいい笑いで嵐を迎えた。その身なりや如才無い態度から、彼がこの店の主人らしい、と嵐は察した。

「おや、お客様一人かい。まあ、お好きな席にかけてくださいな。何か要るかい？」

如才無いというよりはただ単に商売熱心なだけなのかもしない。男の妙に威勢のいい声に内心苦笑しながら、嵐はカウンターの端に座つた。

香辛料の効いた数種類の豆の煮物に薄い固焼きパン、それに砂漠の入り口であるからこそ手に入る新鮮な果物。店主のお勧めを聞きながら、それらで嵐は少し早めの昼食を摂ることにした。

「…へえ、それじゃお客様、お一人で砂漠を越えるつもりなんですか？見た目によらず大胆だねえ。まあ、若けりやあ何でもできるからねえ」

「若けりや…ね」

店主の言葉に嵐は微かに苦笑いをした。それはよく見なければ分からぬ程度のものであったが、店主は敏感にそれに気がついた。

「おや、だつてお客様まだ随分お若いだろ？いいねえ、まだまだ先のあるもんは。私なんかもう40になりますからねえ。いや、私もお客様ぐらゐの歳の頃には随分冒険もしたんですよ。そもそも私の生まれは東国の方でねえ、親父はそりやあ勤勉な農夫だったんですけど…」

何故か唐突に身の上話を語り始めた店主に適当に相槌を打ちながら、嵐は出てきた料理を食べ始めた。話し好きで陽気な店主は料理の腕もなかなかのものであるらしく、嵐はかなり本気で料理に集中していた。

「親父さん、相変わらずだねえ」

新たに三人連れの客がカウンターに着いて親しげに店主に声をかける。ちょうど話に一段落ついていた店主が、嵐に一つ会釈をして

から新たな客に笑顔を向ける。

「ああ、いらっしゃい。毎度毎度ありがとうございます」

店主の声も親しげなものになる。どうやら常連がついているらしいな、と嵐はその様子を見るともなしに眺めながら、彼らの会話を聞いていた。そして何気なく嵐は店内に目をやつた。そこで嵐は一人の人物に気がついてふと視線を留めた。

（あれは……）

嵐から見て右側の店の奥、大きなテーブルの一角に一人の人物がいた。遠目にもそれとわかるほど美しく長い黒髪に白く端正な顔。細身の身体を戦士の装いで包んだ、女。

昨夜宿屋で見かけた女であった。

この酒場、『棗の木』は主に旅行者や冒険者の情報交換の場として利用される店であり、店内のあちらこちらで商人が商談を行なつてしたり、旅の情報を交換し合っている集団があつたり、または旅の道連れを探す人がいたりと、様々な人で賑わっていた。その中には自分の能力自体を売る者　つまりは傭兵や用心棒として雇い主を探す者もいた。彼らは情報交換の必要性もあつて大体一つどころに集まつてあり、この店ではそれが店から入つて右側奥の大テーブルであった。そこに紅一点として混じつている彼女は、非常に目立つていた。

まず第一に屈強な男たちの中にはつて、彼女は非常に華奢に見えた。もちろん女としては体格のいい方であるが、それでも際立つて体格がいいというわけではなく、周囲のいかにも鍛えられた体格のいい戦士達と比べると、かなり見劣りがした。

第二に彼女は非常に寡黙で、表情にも乏しかつた。もちろん彼女は戦士であつて商人ではないのだから雄弁である必要は無いし、口数の少ないことが問題になる職業ではない。しかしそれにしても周囲の戦士達と比べても彼女の寡黙さは際立つていた。もちろん全く周囲の会話に参加していないわけではなかつたが、それにしても笑

顔一つ見せないあたり、やはり変わっていた。

第三に 恐らくこれが一番丑を惹く点であるつが 彼女は非常に美しかつた。

昨夜嵐が宿屋の^いわしい明かりの下で、しかも遠田で見たときにも美しい女だと思ったものであつたが、今それよりも明るく近い場所で見た彼女は、文句の付けようのない美貌の持ち主であることがはつきりとした。

こちらに見せる横顔は砂漠の日差しにも負けない白^{しら}を^ぞ、くつきりとした鼻筋が印象的であった。髪の毛は黒く長く、後ろで束ねたその先は腰の辺りまで届いていた。時折向きを変える顔の中で瞳は澄んだ強い光を湛えた濃い色をしていた。恐らく体格は自分と同じくらいであろう、と嵐は見た。しかし自分よりもずっと鍛えられた体格であることは、剥き出しになつた肩や腕からも明らかであった。彼女は腰帶に細身の刀を差し、両の手に革の手甲をはめてはいたが、他に身を具うものは着けておらず、全体的に涼しげな軽装であった。嵐自身は意識していなかつたが、よほど長いこと嵐は彼女を見ていたらしい。嵐の隣に座つた三人と話をしていた店主が嵐に声をかけてきた。

「お客さん、彼女が気になりますか」

そう言われてようやく嵐は自分が彼女を随分長く見つめていたことに気付き、きまり悪そうに苦笑した。

「いや……気になるというか何というか、あれで戦士だといつのがのう……」

そう言つ嵐に、隣に座つた商人達も揃つて頷く。

「そうだよなあ、どう考えても不思議だよなあ、あれで、あの容姿で戦士をやつてるつていうんだから」

「しかも相当腕がいいつていうんだから、ますます不思議だよなあ「不思議というよりももつたといないと思わないか? あんないい女なの!」。ありやあ、どこへ持つていつても恥ずかしくない器量だぜ? ちよおつと飾つてみりやあ、そんじょそこの貴族の姫君よりもよ

つぱじ映えること、間違い無しだぜ」

「ほう、そんなにあの者は腕のいい戦士なのか？」

嵐が彼らに水を向けると、店主も含めて全員が大きく頷いた。

「いってなもんじゃない。今まで傭兵やつて負けなし、契約違反なし。彼女がついた旅じやあ何にも心配がないってことだ」

「負けなし」と言つてもあの者はまだ随分と歳若いであろう？」

「ああ、確かにまだ若いな…まだ20にはいつてないだろう？」

「ああ、確かそうだ。だが傭兵のキャリアはけっこうなものだろう？噂では10になるやならずといった頃から戦士をやつていたって話だしな」

10になるやならずの幼女が剣を握つて戦う…いくらなんでもそれは伝説めいていて、嵐にはにわかに信じられなかつた。

「確かにそれは噂の域を出ませんがね、少なくともここ5年近くの彼女の戦歴は立派なもんですよ。最近ではティタニスの辺りに出没していた盗賊団を撃退したということです。負け無しといふ噂は伊達じやありません」

ティタニスとは嵐の記憶に間違いがなければ砂漠の中ほどにあるオアシスのことであった。確か数年前に鉱石が発掘されて十数人の人が住み着いて村のようになつた所である。

その後も彼女に関する彼らの話は続いた。それによると彼女の名前は紅珠^{レッドジュ}。どこの組織にも国にも人にも属さないフリーの戦士で、傭兵やボディーガードとして働いている。この砂漠の道では知らぬ者のないほど有名な戦士で、その美貌とあいまつて既に伝説めいた人物になつてゐるらしい。しかし彼女の素性は一切謎で、誰も彼女がどこに生まれでどこで育ち、何故女だらに戦士などやつているのか、そもそも誰に戦士としての技を受けられたのか、プライヴェートなことは全くわからないのだという。その謎めいた部分がまた彼女の魅力にもつながり、傭兵としての戦績が彼女の名を上げているようであった。

「もしもお客様さんが旅の道連れを望むなら、彼女は確かにお勧めて

すよ。ただし今や彼女を雇うにはけつこうな代価が必要ですからねえ…正に高嶺の花ですよ、紅珠は

店主の言葉に商人たちは揃って深々と頷いた。そんな彼らから嵐は視線を移した。戦士達の集う卓でカウンターの噂の主は、それとも知らずに静かに変わらずそこにいた。

にわかに陽光が陰った。嵐が透明なガラスをはめ込んだ窓に田をやると、先ほどまで一点の曇りなく晴れていたはずの空が、薄墨に染まつて見えた。気のせいか、ざわざわといづ音も聞こえる。

（雨…？まさかのう、こんなところで……）

かといって日が陰る時間にはまだ早すぎる。嵐が小首をかしげていると、その視線に気付いたカウンターの客たちも窓外に視線をやり、不思議そうな表情になる。ちなみにカウンターに座る客は少しずつ増えており、現在では15人ほどがＬ字型のカウンターに並んでいた。そしていつの間にか嵐はカウンターの端から席を移動して彼らの中心で話に興じていた。カウンターの客はほとんどが旅の商人たちであり、話題も情報も豊富であつたし、基本的に人見知りをするものはいなかつた。そのせいもあってか、嵐はすっかり彼らとうちとけてしまつっていたのである。

「なんだあ？…いくらなんでもおてんとさんがないにゃあはやいんじゃねえか？」

「あつたりまえだろ？。まだまっぴるまだぜ」

窓の外の様子に、不審の声があがる。

「雨でも降ってるんじゃないですか？…ほら、なんかざわざわいつてますよ」

耳に両手を当てて聞き耳を立てるよつよしながり直つ男に、隣の男が呆れ声を返す。

「馬鹿言つてんじやないよ。まだ雨期には早すぎるぜ」

「でもほら、スコールとかもあるじゃ ないですか」

それでも彼はあきらめきれないらしく、ねえ？と店主に相槌を求めた。しかし店主も首をかしげる。

「いや…まあ、全く降らないってこともありますんが、それにしても時間が早いし、何より雨の音とは違うようですけど…」

その頃にはカウンター以外の席の客たちも異常に気付き始めた。

『棗の木』は卓ごとに違う話題が違う言語で話されているとも言われるほどの店で、しかもその話題のほとんどが契約や商談話であつたため、まず窓の外をゆっくり眺めながら食事をする、などという優雅な客はない。しかも建物 자체も屋外の暑熱を防ぐために開口部を少なくしてあり、窓もやや小さめで数も少なかつた。基本的に通気口は天井と壁の一番下部にあるのである。そのために屋内の人達が外の出来事に気付くのが遅れるのは、無理もないことであつた。窓際の客が外を覗いて、息を呑んだ。そして慌てて振り返ると店の入り口の扉が外から大きく打ち開かれるのがほぼ同時であつた。

「た！たすけて……！」

息も絶え絶えに転がり込んできたのは若い男女の一組であった。男が女の頭から防塵ケープをすっぽりとかぶせて庇うように抱えている。そして彼も彼女の被った防塵ケープも鉤裂きだらけで、男は頭から血を流していた。

「な、何があつたんです！」

店主が仰天した声を上げてカウンターから駆け出そうとする。店内の客も一挙に騒然となつた。戸口に近い者がそれを開けて外を覗こうとするのを、転がり込んできた男が振り返つて慌てて制止の声を上げる。

「だ、だめです！！開けちゃあ、外に出ちゃあ……！！！」

そう言つてゐる間にも、再び扉が壊れんばかりに打ち開かれて、二人、三人と転がり込んでくる。皆一様に傷だらけで、息を切らして店内に転がり込むと、呆然として床にへたり込んでしまつた。店主は慌てて裏から薬箱を持って来るよう店員に指示をし、自身も入用のものを取りに駆け出した。店内の人間も騒然としてある者は窓に

群がり、ある者は続々と転がり込んでくる怪我人たちの周りに集まつてくる。

「何があつたのだ？」

嵐が最初に店内に飛び込んできた男女に手を貸して手近な席に座らせながら尋ねる。女の方は余程恐ろしい目に遭つたのか、ただ泣きじやくるばかりで上手く喋れない。男の方もがたがたと全身震えていたが、それでも何とか息を整えて、嵐にすがるような目を向ける。

「と、鳥が……！…いや、鳥じやない…何かが、ばけものがいきなり大群で襲つてきて…！…！」

「蝙蝠だ！あれば鳥なんかじゃなかつた、氣味の悪い姿で、嫌な羽音をさせてやがつた…思い出すだけでも氣味が悪い…！」

他の客に手を貸してもらつて机の脚にもたれて床に座り込んでいた男が声を上げる。その男も全身傷だらけで顔は恐怖に歪んでいた。窓から外を覗き込んでいた客も、悲鳴に近い声を上げる。

「蝙蝠だ！大群で人間を襲つてやがる。なんなんだよ、一体…！」

次々に窓外の様子が報告される。嵐は店主を手伝つて転がり込んできた怪我人たちに水を渡してやりながら、内心首をひねっていた。（蝙蝠…？何故いきなり奴らが襲つてくるというのだ？この辺りに生息している蝙蝠は羽虫や植物につく虫を餌とする、おとなしい種のはず。人間を…他の動物を襲うなどという話は聞いたことがない。そもそも蝙蝠の活動時間は日の陰る夕刻からだ。だいたいこんなに天気の良い空氣の乾いた日では餌になる羽虫も大量にいるはずがない。この日、この時間に、しかも日が陰るほどの大量の蝙蝠が、一体何処から出てきて何故人間を襲うというのだ？）

周囲の喧騒の中で酷く冷静に考えている嵐の耳に、鋭い声が響いた。

「…危ない！窓から離れろ…！」

低音の、よく響く女の声の一瞬後に、甲高い破碎音が響いた。窓の側に群がつていた客たちの悲鳴とガラスの割れる音が連鎖する。

『棗の木』店内にとりどりの悲鳴が反響した。

破られた窓に駆け寄る者。怪我をした者を安全地帯へ引きずり出そうとする者。我先にカウンターの奥へと転がり込もうとする者。卓の下に潜り込む者。うまく動けず転ぶ者、それにつまずく者、目の前の背中を押し退けようとする者。その中で何人がが迅速に動いていた。

「雨戸を閉めろ！」

「扉から離れる！」

「開口部を塞げ、手を貸してくれ！」

数箇所から指示の声が飛びぶが、ともすればその声すら悲鳴にかき消されそうであった。

「きやああ！」

女の悲鳴が響く。カウンター付近で店の人間たちを手伝つて怪我人の手当てをしていた嵐がはつと顔を上げると、二階の部屋の一つから女が転がり出でてきた。一、三羽の蝙蝠に襲われている。女は頭から被つていたショールを打ち振りながら蝙蝠を追い返そうとしていたが、それをかいくぐつて蝙蝠の嘴や翼や爪が女の体に傷を増やしていく。

「助けて、助けてえ！」

女は恐怖に引きつった表情で、それでも何とか助けを求めようとしていたが、周囲の人もひらひらと飛び交う蝙蝠を捕らえることは至難の技で、手をこまねいでいるような状況であった。しかし嵐が見る限り、それ以前に我が身の安全を図りうとするの方が多いかった。

「…そういうばー階の様子はまだ…」

店主の咳きが聞こえる。

見かねて嵐がそちらに行こうとしたとき、視界の端に黒い影が躍つた。はつとしてそちらを見ると、長い黒髪の人物が卓を蹴つて人々の頭上を越えていくところであった。両の手は腰の刀に添えられている。

(あれは…紅珠とかいう…)

人の間をすり抜けて走りながら、嵐は目を見張った。

紅珠は階段を三段飛ばしで駆け上ると、手すりを踏み台に、大きく跳躍した。そして襲われている女を囲む人垣の内側に両足で着地すると、同時に弾るように一步、踏み出した。

白刃一閃。ちょうど踏み込みの先にいた蝙蝠が両断され、ぼとぼとと床に落ちた。

(ほう、なかなか……)

ようやく階段下に辿り着いた嵐は、素直に感心していた。

(あれが噂に聞く『居合切り』とかいうものか。一瞬で対象を把握する能力、無駄のない身のこなし、攻撃の瞬間に全ての気合をぶつける、呼吸の計り方、そして迷いのない剣捌き。全ての技術が噛み合ってはじめて成功する技だ。実際見るのは初めてだが…しかし、あれは…)

考えつつも階段を一段飛ばしで駆け上がっていた嵐は、人の間を器用にすり抜けて輪の内側に出る。腰の後ろに差した杖を手にして見ると、紅珠は女を庇いつつ蝙蝠を追い払おうとしていた。刀は右手に抜いたまま機をうかがっている様子であったが、変幻自在の蝙蝠の動きを捕らえきれないようであった。

(やはりな。あれは一撃必殺の技。それゆえに一撃目以降は極端に威力が落ちる。ましてや動きの予測のつけにくいものが相手では…)

「もういやああ～～

そのとき半泣き状態の女がいきなり、叫びながらショールを握った手を大きく振りかぶった。そしてそれを闇雲に振り回す。側にいた紅珠が慌てて避ける。大きく広がったショールが蝙蝠の翼を叩いた。空中でバランスを崩した蝙蝠が、そのまま進行方向を変える。

「あっ！！」

周囲の人垣が慌てて後退し始める。

「危ない！」

誰かの叫び声がする。攻撃対象を変更したらしい蝙蝠が、真っ直ぐ

に小柄な赤毛の人物に向かっていく。しかしその人物に届く前に、

蝙蝠は空中で叩き落された。

「ふむ、なるほど」ことか

自分以外には聞こえない声で嵐は咳いた。その左手には今しがた蝙蝠を叩き落した杖が握られていた。

「早く！全部の部屋の雨戸を閉めるんだ。それからみんな部屋から出る。念のために戸を開めて」

ぱうつとしている人々の上に、紅珠の鞭打つように厳しい声で指示が飛ぶ。目の前で繰り広げられた光景にいささか気を抜かれている人々も、その口調に打たれてはつと氣を取り直した。わらわらと動き始めた人々を見やつてから、紅珠は刀を収めた。そして周囲には気付かれないくらい小さく息を吐き出した。

「大丈夫か、おぬし？」

気遣うような柔らかい言葉に、紅珠は振り返った。その言葉が自分に向けられてのものと思ったからではなく、若い男の声とそのいささか時代がかつた言葉遣いが妙にアンバランスであつたからである。

振り向いた先では、蝙蝠が撃退されて氣が抜けたのか床にへたり込んでいる女を、男性にしては小柄な人物が助け起こそうとしているところであった。

（ああ、さつきの…）

紅珠はその人物が先ほど蝙蝠を杖で叩き落した男であることに気がついた。先ほどは体勢を崩した状態であつたためにはつきりとは見えなかつたのだが、その服装は確かに女の体越しに見えたものであつた。男の背丈は紅珠と同じくらい。赤茶けた癖つ毛に瞳は深い森の色。見たところ年齢は自分とさほど違わないように、紅珠には思えた。

（それにしては言葉遣いが時代がかつているようだけれども…）
しかしどうあえずそんなことはどうでもよいことであった。今自分

がしなければならないことを思い出して、紅珠は踵を返そうとした。
「おぬし、手伝ってくれぬか。この人を下まで連れて行きたいのだが」

背を向けかけた紅珠に、そのとき嵐が声をかけた。呼び止められた紅珠が首だけで振り返る。

「あなたひとりで大丈夫でしょう？私は一応他の部屋の様子を確認してきますので」

紅珠の口調に、嵐が微かに眉を顰めた。一方、気を取り直した女は、思いの外元氣であった。

「大丈夫ですわ、お一方。おかげをまで助かりました。一人でも歩けますので…」

「いや、そういうわけにもいかぬであろう。わしが肩を貸す。…行こうか」

体格的には同じくらい、性差のためかやや女の方が大きく見えるくらいである。の二人が立ち上がりてゆっくりと歩き出すのを見て、紅珠は再び歩き出そうとした。嵐は女に肩を貸して歩き出しながら、ちらりと背後を振り返った。既に紅珠は背を向けて歩き出そうとしているところであった。

そのとき、騒がしかつた階下から、一際高い怒鳴り声が聞こえてきた。

「何だと！？もういつぺん言つてみやがれ！」

嵐は驚いて声のした方に目をやつた。するといきりたつている戦士らしき装いの男が見えた。対するのは若い男である。どうやら彼も襲われて逃げ込んできたらしく、頭に巻かれた包帯が痛々しい。顔色も青ざめているが、それは怪我による出血のためだけではないらしい。青ざめた顔の中で、目だけはギラギラとして目の前の大男を睨みつけている。

「何べんでも言つてやるよ！あんたらはがたいだけの木偶の坊だ。こんだけ雁首揃えといってあいつらに何の打つ手もなしかよ！…こんだけ怪我人が出てるんだぜ。あんたら戦士だろ、何とかしろよ…！」

男は多少上ずつた声で、それでも一気にそこまでまくしたて、ぜいぜいと荒い息をついた。彼らの周囲には何人もの人がいたが、誰も二人を止めようとしてない。むしろ彼ら一人の熱が周囲にじわじわと伝染しているかのようである。怪我をした者、怪我はせずとも襲われる恐怖を味わった者、何とかしたくとも戦う力がない、足りないことを自覚している者たちが、男の言葉に同調している。いや、男の言葉そのものが、その空気を代弁して出てきたものだつたのかもしれない。

(…まずいな)

嵐は内心舌打ちしていた。

男の言い分を間違いだとは思わない。しかし、今この場で、この状況で言つことは、やはりまずいと言つしかない。誰も喜んで手をこまねいているわけではないのだし、全員がそうだとは言えないにしても、今、この状況で一番歯痒い思いをしているのは、やはり何とかしたいと思い、またそれなりに能力もあるのに、それをどう活かしたらよいのかわからない、彼らのような戦士たちであろうから。(早まつた行動にでなければよいのだが…)

嵐は眉を顰めながら、階下の状況を見守っていた。

何とか宥めた方が良い、そう考えつつ騒ぎを見ている嵐であつたが、階下の雰囲気は急速に険悪なものになつていつた。何とかその場をとりなそと店主が間に入ろうとしたが、熱くなつている人々には制止が効かない。逆に店主に殴りかかるとする者まで出る始末で、それはさすがに付近の者が制止していた。

(かと言つてわしが出て行つても意味がないしのう…)

自分の外見に威厳がないことを、嵐は誰よりも承知していた。

ふ、と何の気なしに視線を動かした嵐は、こくりと背を向けてしゃがんでいる紅珠に気がついた。

(なんでこやつ、まだこのようなどころに居るのだ…)

彼女は確か先ほど「他の部屋の様子を見てくる」と言つていたはず

であつたが。しかし今、彼女の存在は有難いことかもしれない。そう嵐は思った。

「そなた…紅珠といつたか」

嵐が声をかけると、その人物は多少間が開いてから、振り返った。

「…呼んだか？」

わざとなのか無意識なのにわかには判断できかねる無表情さで紅珠が答える。答えるまでの微妙な間が気にはなつたが、とりあえず今は無視することにする。

「おぬし、何とか彼らを宥めてやつてくれぬか。このままでは不測の事態に陥りかねん。それは避けたほうがよい。…おぬしは有能な戦士として皆から一目置かれていると聞いた。おぬしが声をかけてやれば、皆も落ち着くかもしれません」

そしてどうかのう?と紅珠の顔を見つめる。

紅珠は嵐の言葉に一瞬目を見張り、そして微かに眉を顰める。そのまま視線を階下の騒ぎに向けた紅珠の視線はやや険しい。

「…断る。私には無理だ」

あまりにもあつさりきつぱりと断りの言葉を返され、嵐は固まる。嵐に肩を借りて寄り添うように立っていた女も、ぽかんとした表情をする。彼女は戦士の紅珠の噂を知らなかつた。しかし紅珠の剣の腕は先ほど助けられたときに見て知つてているし、感謝もしている。何より紅珠は女である彼女でさえ見惚れるほどの美人であった。その美貌にはどこか高貴ささえもそなわつてゐる。その圧倒的な外見と実力があれば、大抵の者が彼女を尊重するだろう。現に紅珠の言葉は蝙蝠の襲撃に気を抜かれていた人々に活を入れた。紅珠の言葉には…いや、紅珠の存在には何か、力があるのだ。そう彼女は思う。

「何故そう思う?」

嵐を取り直した嵐が低く尋ねる。

「何故無理とわかるのだ」

あくまでも嵐の声音は平静である。しかし嵐に支えられている女は急に肌に感じる空氣が冷えたような気がした。そんな様子に気付か

ねはずもないだろうに、無表情に戻った紅珠には微かな動搖もない。

「無理というか、無駄だろう。ああも熱くなっている人たちに何を言おうが言葉は届かない。正論を説いてもかえって火に油を注ぐ結果になりかねない」

「だが何もせばその先の結果は明白であろう?むさと破局を待つより、無駄と思いつつも動いた方がよいではないか。いや、何より無理とか無駄とか決めつけるにはまだ早いとわしは思うが?」

その聲音に咎める響きはない。むしろ落ち着いたやうとりにさえ聞こえて、かえつて場の空気が冷えてゆく。

紅珠は溜息のように小さく息を吐くと、初めて真っ直ぐに嵐を見つめた。

「確かに理屈ではそうかもしれない。だけど根本的なところで私は頼むのは筋違ひだと思います。私は確かに戦士であるし、その方面ではそこそこの評判を得ています。だけどそれはあくまで戦士としての腕が認められているということ。私は人格者ではないし、彼らに尊敬されているという事実もない。私に彼らを何とかする力はない。…その資格もない」

「資格とは何だ」

最後には表情を僅かに苦いものに変えて吐き棄てるように咳いた紅珠の言葉を、嵐がとらえる。

「資格とは何だ。人にものを言うに資格が必要か?意見を述べるのに資格が必要か?他者より優れていなければ己の思いを述べることも叶わぬとでも言うのか?」

もし仮に資格が必要だとしても。それは決して何もしない者に与えられるものではない。ただ優れていれば「与えられる」というものでもない。それは動く者に与えられるものだ。そしてそなたにはそれだけの条件が揃っている。他者に働きかけるだけのちから能力を持つている。動くに動けぬ者もいるのに動ける者が動かぬのは、それは罪なことではないのか

「あなたはずいぶん口が達者でいらっしゃる。それにずいぶんと甘

い理想をお持ちのようだ」

紅珠が僅かに眉を顰めながら言つ。しかしその声は冷えたままで、僅かに眇められた瞳の色も冷静なままであった。

「甘い？」

「ええ、甘いですね。間違つていいとは言わない。そうできれば理想的でしよう。しかし私はそんなに甘くはない。甘さを持つて生き延びられるほど、この世界は優しくないのだから。そしてそれは彼らとて同じこと」

紅珠がちらりと階下に目をやつた。そこでは各所で睨み合い、罵り合い、果てには掴み合い今まで生じつづある。

「彼らは子供ではないのだから。その生き方に責任を持つべき人たちだ。より良い選択を、判断を自分自身のためにすべき人たちで、それだけの経験も学習も積んできているはず。もし判断を誤つたら、それはすなわち自分の身の破滅につながること、百も承知のはず」

いつそ冷たくさえ聞こえるほどの冷静さで紅珠は続けた。

「一時の激情に判断を誤るといつなら、それはそれまでのものだったということでしょう」

嵐は一つ大きく息を吸つて、吐いた。そして女を支えていた腕を外すと、紅珠の方に一步、踏み出した。紅珠は真っ直ぐに嵐を見据え、動かない。

「あつ……」

女の声に、一人が振り返つた。見ると階段に座り込んでいた女が、階下の様子に息を呑んでいた。階下からは乱暴にドアを開け閉めする音や耳障りな金属音、そして複数の靴音。女が二人の方に縋るような目線を向ける。

「あ、あの……なんだか、外に出て行かれる戦士の方々が……」

嵐は身を翻して手すりから身を乗り出し、階下を覗き込む。紅珠は顔を顰めながらも足早にその後に続く。

「おやめなさい！外に出て行って何ができるんですー勝算はあるの

ですか！？」

店主の必死の声がする。

「つるせえ、ああまで言われて黙つてられつかよ。よつせやつらを
ぶつ殺していくりやあいいんだろうが。やってやるよ……！」

大柄な、まだ若さを残す戦士が縋りつくように吊り上める店主の腕
を振り払うと、そう言い放つて出て行った。

「へつ！臆病もんに何ができるんだよ……！」

その背中に捨て台詞を吐く者。どうやら先ほどの戦士にであらうか、
殴られたらしい頬が赤く腫れていた。さらにも、「三人の者が捨て台
詞を吐きつつ外へと駆け出してゆく。

「ど、どうしましよう。大丈夫でしょうか、あの方々は……」

おひおろしたように女が言い、一人の方を見る。

「…馬鹿なことを」

紅珠がぽつりと呟いた。その咳きを耳にして、嵐の眉が跳ね上がる。
ひゅっと空を切る音がして、一階にいた人々が息を呑む。嵐の杖
が紅珠の鼻先にぴたりと突きつけられていた。

「もうよい。おぬしには頼まぬ」

静かにそつ言い捨てるど、嵐は身を翻し、階段を駆け下りていった。
そして思わず道を開ける人々の中を通り、誰にも止める暇を与えず、
外へと飛び出していく。

暫く沈黙していた店内が、呪縛が解けたように一気にざわめき始
める。

様々な感情の入り混じった囁きの中で、紅珠は暫く身動きできず
に立ち尽くしていた。

(…何故私があのよう言わなければならぬ)

理不尽だ、と紅珠は思った。彼女は間違ったことを言つたつもりは
ない。言つたことを訂正する気も翻す気もない。先ほどの言葉は間
違いなく紅珠の本心であったのだから。

(それは確かに売り言葉に買い言葉になってしまった氣はするけれ
ども…)

恐らく常ならば紅珠はもつとつまく言葉を選べたことであろう。確かに彼女は世辞を言うのは下手であったが、求めて他人といざいざを起こうとしたことはない。

（……少々気を取られすぎていたのか…）

紅珠はふっと視線を動かし、先ほど自分がいた辺りに目をやる。そこには彼女に切り捨てられた蝙蝠と、嵐が叩き落した蝙蝠が落ちていた。紅珠がそちらに歩を向けると、周囲にいた何人かが無言で退く。紅珠自身は意識していなかつたが、彼女はずいぶんと剣呑な雰囲気を纏っていたのである。

床に出来た小さな血溜まりの側で紅珠は膝を突いた。嵐に叩き落された蝙蝠はまだぴくぴく動いていたが、頭が変な方向に捩れてい。蘇生することはないと確認した上で、紅珠は用心深くその体を調べた。そして自分が先ほど抱いた疑問が正しかつたことを確信する。しかしそれは更に彼女の疑惑を深める結果となる。

（…何故、このようなものがここに… いえ、それ以前に何故、存在しているのだろう…）

じつと考え込んでいる紅珠に、おずおずと近づいた男が声をかける。

「紅珠さん…」

はつとして紅珠は振り返る。その表情は既に常の冷静さに戻つている。

「あの。一階の部屋の窓、全部雨戸を閉めてきました。それから全員部屋から出てもらつて、とびらは念のために机とか椅子とかで押さえておきました。…大丈夫ですよね、もう」

男の不安げな視線を受けて、紅珠は相手を安心させるように軽く口元に笑みを浮かべてみせた。

「大丈夫だと思います。一匹二匹ならともかく、大量に入つてこられるのが厄介なだけの相手ですから。あとは早く立ち去ってくれるのを待つだけですが…」

言いつつ、紅珠はふとあることに気がついた。そしてぱつとばかり

に立ち上がり天井に目をやる。そして手すりに飛びついて階下の力
ウンターの方に向かつて怒鳴る。

「マスター！ 天井の通気孔を閉めて！ 早く！」

それだけでなくよく通る紅珠の声は、ざわめきの中にはいる店主の耳
に間違いなく届いた。はつとして階上の手すりから身を乗り出さん
ばかりにしている紅珠の姿を認め、店主は彼女の言わんとしている
ことに気がついた。慌ててカウンター内にいる店員に通気孔を閉め
るよう、指示を飛ばす。

「うわああ！！」

紅珠の背後で悲鳴が上がる。

体ごと振り返った紅珠は、天井に目をやって舌打ちする。ぱたん
ぱたんと軽い音をさせながら閉ざされ始めた通風孔の影で、小さく
光るもののが幾つか見える。なにやらもぞもぞと動く音もある。

（遅かつたか…！）

いくら自分でも全部を切り捨てる自信はない。彼女は自身の力量を
正確に把握していた。

（それに下手をすればこの店内が恐慌状態になつて大惨事が引き起
こされる可能性もある）

むしろその方が恐ろしい。店内には元々いた客と避難してきた人々
で既に満員状態である。中には老人や子供もいる。パニック状態に
なれば彼ら弱い者を守ることがほぼ不可能となつてしまつ。

（あいつらが動く前にあそこに留めおければいいのか…）

やや混乱していた紅珠の思考も、急速に落ち着いていく。この辺り
が紅珠の戦士としての名声を支えている要因、つまりはいついかな
るときも冷静な判断力を失わない、という点である。

分析と思考はほぼ一瞬の間に、完璧なポーカーフェイスの内で行
われた。そして対応も素早かつた。

紅珠は自分の髪をまとめている幅狭の布に手をやり、それを一氣
に解いた。ふわりと翻る布の裏面には何やら文字が書き込まれてい
る。そして反対の手で懐を探り、ナイフを取り出す。しかし一本で

は足りなかつた。普段はもう少し身につけていたのだが、今は軽装であり装備もほとんど持っていない。階下には自分の荷物も置いてあるが、それを取りに戻つている暇はない。

「誰か、ナイフを持つていたら貸してくれないか？」
辺りにいる人々に目をやると、何人かが強張った表情のまま、何とか頷く。彼らからナイフを借りると、紅珠は何やら文字の書かれている布に、少しづつ間隔を空けてそれらを結びつけると、それを天井に投げ上げた。ナイフ投げの要領で天井に大きく円を描くよう、布を縫い止める。最後の一本が天井に刺さると、一瞬ぼうっと布が赤く光つた。

「な……何ですか、あれは？ 紅珠さん」

いつの間にか上がりきていた店主がぽかんと天井を見上げる。

「……結界……のようなものです。あの布には守護の言葉が書かれているんです。あれを邪な気持ちでもって破ろうとすれば強い反発力が生じます。……とりあえず、あの程度の数ならあの場に留めておけるでしょう」

「はあ……結界、ですか……さすがですねえ、紅珠さん」

店主の言葉に紅珠は苦笑する。

（でもあれはあくまで“守る”だけ。根本的な解決にはならない。それに効力はあまり長続きしない。あれが効いている間に何とかこの事態を解決しなければならない……そのため、には……）

考えるまでもなかつた。既に紅珠の中では結論が出ている。

「ああもう！……」

突然怒鳴り声を上げた紅珠に、隣にいた店主が飛び上がる。紅珠はきつ、と顔を上げるとやけに淵みのある表情で店主に視線を向ける。紅珠はかなりの迫力美人であつたから、淵みをきかせた表情は似合いですぎて、かなりこわい。

「いいですか、私が戻るまで、絶対に誰も外に出さないこと。あの天井のナイフを抜いたりしないこと。いたずらに皆を不安にさせたりしないこと。お願ひできますね」

「は…はい…」

じくじくと店主は頷いた。それを見届けてから、紅珠は身を翻して階下に下りた。そして壁際に放り出されていた自分の荷物から細長い包みと小さな皮袋を掘み出すと、そのまま無言で黒髪をなびかせて店を飛び出していった。

『棗の木』を出た嵐の耳を不吉な羽ばたきが打つた。視線を上げた先では、いまだ空を斑に染めて蝙蝠の群れが飛び交っていた。

視線を落とすと、街中にいた者のほとんどは既に屋内に避難した後のようにであった。それでも逃げ遅れた者や、逃げる途中で蝙蝠に襲われて傷を負い、動けなくなつた者、または逃げたくとも動けなかつた者など、まだまだ何人もの人が屋外で蝙蝠の群れから身を守るのに必死の状況であった。そして嵐よりも先に飛び出していった戦士たちも、やはり彼らを放つておくわけにもいかず、そこここで蝙蝠退治をしたり逃げ遅れた人の避難誘導をしたりと、辺りは騒然としていた。

(しかしこれではきりがないのう)

蝙蝠相手に武器やら布やらを振り回している彼らの様子を見ながら、嵐はそう思つ。

まず、蝙蝠といつもの動きが複雑で先の予測がつけにくい。もちろんそれは他の野生動物にもいえることであるが、蝙蝠の動きは、似たように翼を持つ鳥よりもさらに変化に富んでいて、どちらかというと昆虫の動きに近い。規則性があるようでいてなく、動きの先読みがしにくい。かといって後を追うにも人間の追いつけるスピードではない。狙うとするなら正に攻撃を仕掛けてくるとき、なに道はあるが、それも先ほど『棗の木』店内で紅珠や嵐がやつてみせたように、少數であるからこそ可能なことなのであって、多勢に無勢ではそれもあり効果的な方法とは言えない。

(それにもう一つ、引っかかる点もあるしのう…)

眉を顰めつつ考えを廻らしていた嵐に、羽ばたきが近づいてきた。

はつとそちらに目をやつた嵐は、間一髪、右腕の袖を振るつて蝙蝠の攻撃をかわした。

(…ぼうっと考へ込んである場合ではなかつた)

内心で己を叱りつつ、嵐は駆け出した。動いている方が攻撃の対象になりにくないと判断したためである。その嵐を、先ほど攻撃をかわされた蝙蝠が空中で転回すると追ってきた。嵐は聴覚と全身の感覚を総動員してその気配を追う。

(3……2……1)

そしてタイミングを計つて地面に身を投げる。地面で一回転する嵐の頭上を、再び攻撃をかわされた蝙蝠が飛び去つてゆく。一方、素早く身を起こした嵐は左手の杖で地面に自分を囲む円を描いた。そして張りのある声で宣言する。

「是は祓われた地なり。悪しきもの踏み入ること能わず」

そのときもつ一度空中で転回した蝙蝠が再び嵐めがけて空を飛んできた。しかしそれは途中で阻まれる。地面に立て膝ついている嵐に届く前に、蝙蝠は見えない壁にぶつかり、弾かれる。そしてまるで雷撃に撃たれでもしたかのように全身を奇妙に痙攣させつつ、ぼとりと地面に落ちた。

「ふウ……」

地面に落ちても尚びぐくと全身を痙攣させている蝙蝠を見て、嵐は大きく息をつく。

「Jのとき嵐が使つたのは身を護る「結界」である。結界といつてもこれは最も原始的なもので、何らかの方法で囲われた「陣」を、「それはどんな場所か」と宣言することによって意味付け、力を持たせるというものである。この場合は杖で地面に描かれた円が、嵐が作り出した「陣」であり、そこを聖域であると宣言することによつて、目に見えない防御壁を現出させ、それに触れた蝙蝠を撃退した、というわけである。

「やはり、これはこいつらに対し有效なやつだのう」

地面で痙攣を繰り返す蝙蝠から左手の杖に目をやって、嵐は呟く。嵐の持つ杖はただの木の棒ではない。護身の力の秘められた、お

守りであり防具であり、そして応用すれば武器にもなるという、非力な旅人にとってはうつてつけの道具なのである。

先ほどの「結界」も、理屈だけなら誰にでも、どんな道具ででも可能なものではあるが、実際に力を持たせるには、それ相応の条件が必要になる。

例えば呪言を操ることによって様々な現象を引き起こす能力を持つ「呪言士」ならば宣言の言葉そのものに力を込めることができる。あるいは様々な超常的な能力を有する「術士」ならば、各自の持つ能力を護身の力に変換することによって結界を生むことができる。しかし嵐のように特別な能力を有していない者でも、何らかの力の込められた道具を使うことによって彼ら能力者と同様な現象を操ることが可能となる、というわけであつた。

ふと視線を感じて嵐はそちらに目を向けた。すると傾いた天幕の陰で、さらに崩れた籠やそれに積まれていたのであろう果物の山の陰で、幼い子供が真っ青な顔をして震えながら、嵐の方を見ていた。

「おぬし…大丈夫か？」

はつとして嵐は立ち上がり、その子供の方へと駆け寄った。そして支えてやりながら先ほど作った結界の中に連れて戻る。見たところ7～8歳くらいの瘦せた少年であったが、よく日に焼けた、腕白小僧といったところであつた。しかし彼も蝙蝠に襲われたらしく、頭から血を流しており、恐怖のためか顔からは血の気が引いている。嵐はその傷がそんなに深いものでもなく、既に血も乾きつつあるのを見て取つて、少しほつとする。とりあえず応急処置にもならないが、懐から取り出した手拭いで傷口を縛つてやると、初めて少年が少しだけ笑顔を見せた。少年がありがとうと礼を言うのに、嵐は無言で頭を撫でてにっこりと笑つてやることで応える。

「にーちゃん、すごいねえ。もしかして術士かなんか？」

人見知りという言葉からは縁遠いらしい少年が、嵐に興味津々といった表情を向ける。嵐はそれに苦笑で答える。

「いや、わしはそんな大層な者ではない。ただこの杖がすごい力を持つておるだけなのだよ」

「へえ、じゃあこれって魔法の杖なんだ。すっげー初めて見たよ、俺」

嵐が示してみせた杖を、少年はきらきらと田を輝かせて見つめる。その純粋な好奇心と尊敬の態度が嵐にはなんともくすぐったく、自然と全身の力が抜けた。

「…へえ、じゃあこれで囲んだとこにはあいつら入ってこれなくなるんだ。だつたらこの街全部囲っちゃえばいいんじゃないの？」

求められるままに簡単な説明をしてやつた嵐に、少年が当然の疑問、あるいは提案を返す。しかしその言葉に嵐は頭を振る。

「いや、これはあくまで『外から入るもの』を入れないようにするためのものなのだよ。だからこれで囲んだ中に既にいるものには何らの効果を与えることもできないのだ。だから、今更この街を結界で包んでも意味がないのだよ… 何とか、根本的にあやつらをこの街から追い出す算段を立てねばのつ…」

呴きつつ嵐は視線を空に向ける。いつもやつて一人が話している間にも数匹の蝙蝠が一人を包む結界に撃退され、地面で無様に痙攣している。その様子をぞつとしない表情で見やつてから、少年は視線を上げる。その先にある嵐のやや厳しい横顔を見ながら、ふと少年が嵐を呼ぶ。

「それにしてもこじちゃん

ん?と振り返つた嵐はどう見ても少年の両親よりも年上には見えない。下手をするとき所の少し年上の友達と同じくらいにすら見える。しかし。

「なんか、にいちゃんの話し方変だよ。うちのじいちゃんみてえ」少年ゆえの邪氣の無さで言い切られ、さすがに嵐は脱力した。自分でも自覚はしているしそう言われることにも慣れてはいたが、やはり直球を投げつけられれば多少は痛い。それで傷つけられるほど彼は若くも纖細でもなかつたが。

「ちなみにおぬし、わしは幾つくらいに見えるかのう?」

ふと嵐が悪戯っぽい表情と口調で少年の目を覗き込んだ。

「ええ?……うーんと、浩^{ホジ}にいちやんぐらいかなあ…」

少年は近所の遊び友達の名前を挙げる。当然嵐にはそれが誰なのかはわからないが、その辺りには深く追求しなかつた。

「そのホンとやらはいくつ何歳なのだ?」

「確かにないだ17とか言ってたかなあ」

「そりか…その者と同じくらいに見えるのだな」

くすくすと嵐が笑う。いや、その表情を見ればびぢぢらかというと『にやあ』といった表現がふさわしいかもしだが。それがどうかしたのか、と少年が問おうとしたとき、僅かに表情を変えた嵐がそれを制して立ち上がった。そして何かに耳を澄ませている。厳しい、と言つほど緊迫した表情には見えないが、それでも何かを感じて少年はじつと黙つてそんな嵐の様子を見つめる。

ややあつてふつと表情を緩めた嵐が、少年の視線まで下りてきた。
「すまぬ。おぬしともつと一緒にいてやりたいが、そりそろわしは行ひひと思ひ」

「……なんかあつたの?」

「つむ、何とかなるやもしれぬと思ひのだ」

あくまでも飄々とした表情と軽い口調で答えると、嵐は少年の頭を撫で、立ち上がった。

「おぬしさこの結界から出ぬようにな。その線さえ消えねばめつたなことでのこの結界が壊れることはないから。ああ、それから…」
結界を出ようとしたり振り返つた嵐が、極めつけに悪戯っぽい表情で笑つてみせた。

「ちなみにわしはおぬしの“ホンにいちやん”の倍ぐらには生きておるようだぞ」

そつと嵐は結界を出て走り去つて行つた。

後に残された少年はやや呆然とした表情でその後姿を見送つてい

た。

当初よりはやや蝙蝠の数の減った街中を、嵐は杖で身を守りながら駆け抜けていた。時折足を緩め、上空に目をやつて何かを確かめるかのように耳を澄ませ、そして再び走り始める。

嵐を導くものは聞こえるか聞こえないかの、微かな音であった。高く高く、集中しないと聞き取れないほど微かな音。しかし気になり始めるときだけに鼓膜を振るわせる、耳障りな音である。

(そもそもおかしいと思つておったのだ)

最初の疑問は、「蝙蝠が人間を襲う」ということ自体。蝙蝠の習性を考えれば、まずありえないことである。たまたま大群で移動してきて、その途中にたまたまあつたこの禾峯露の街を襲つた、とう可能性も考えないではなかつたが、行きずりの襲撃にしては、妙に移動速度が遅い。

(最初はもしかしたらすぐに奴らは去つていいくのではないかと思つておつたのだが、そもそもいかぬようだし。それに何より、しつこい) 次なる疑問。何故蝙蝠はまるで意思を持つているかの如く、執拗に襲つてくるのか。

たまたま自分達の進行方向に田障りなものがあるから、それを排除しようとしたり、自分達のテリトリーを確保したりするために他者を襲う、ということは、動物達が自然に持つてゐる本能の内の一つである。もし仮にこの蝙蝠の行動をそのようなものと考えるにしても、その行動はいたさか行き過ぎである。家屋の窓を破つてまで攻撃を仕掛けるなど、常識では考えられない。

これらから導き出される結論、それは「蝙蝠達は自分達、あるいは何らかの意思に基づいて襲撃を行なつてゐる」というものである。(ではその「意思」はどこにあつて、それはどのどのようなものなのかな?)

その意思が蝙蝠達のものでないとしたら、誰かが何らかの方法で操

つてはいる、そう考えるのが自然である。

(ではそれは何者で、どんな方法でこれだけの数の蝙蝠を操つているのか?)

その疑問に対する答えを、嵐は高く響くその音に賭けてみたのである。

(確かに蝙蝠には人間には聞き取れぬほど高い音を聞き取る能力が備わっているはず。通常ではそれを仲間内での情報交換の手段としていると考えられている。また弱い視力を補うものとしてもその能力を応用している。故に彼らは変幻自在な動きが可能となり、衝突の危険を回避したり、獲物の正確な位置を知ることも可能となるという。)

では、もしそれを応用し、利用することができたとしたなら…?

全ては推論である。そしてまた、彼の知識もあくまで「知識」であり、彼自身が実証したものではない。しかしこの「情報から現状を打破する方策を練る」能力、これが、純粹な戦闘能力という面では「人並み」の域をはるかに超えることのない嵐の持つ、特化した能力なのである。

はっきり言つて、嵐は非力であった。それなりに体も鍛えていたし、人並みに武器を扱うこともできたが、決して人並み以上の力は持つていなかつた。見た目の貧相さに反して体力はけつこうあり、持久力もあつたが、腕力は人並みで、差し引きしてやはりどこまでも嵐の戦闘能力は「人並み」を超えることはないのである。彼の武器はあくまで彼の頭脳と左手の杖一本のみであつた。

(この場を收めることは彼ら戦士たちに任せておけばいいだろ。何より、わしにはどうしようもない。この杖でできることはせいぜい、暫くの間身を護ることだけ…)

身を護る力を応用すると、先ほどのように結界を張つたり、杖で蝙蝠を叩き落したり、といったようなこともできるのである。「過剰防衛」あるいは「攻撃こそ最大の防御なり」ということである。(高く響く、風を切り裂くような音 おそらく『笛』の音。その

発信源さえ、つかめれば……）

走りつつ考えを廻らせ、そして全身の感覚を微かにしか聞き取れない音に集中させている嵐の田の前に、何匹田かの蝙蝠が現れ、反射的に振るわれた杖に叩き落される。しかしやや反応が遅れたためか、衝撃が反動として嵐の姿勢を崩す。

とつさに目の前にあつた柵に掴まつて転倒を免れた嵐は、ふうつと大きく息をついた。そして息を整えつつ視線をゆっくりと上げる。いつの間にか嵐は街外れにまで来ていた。嵐が掴まつたのは街境の柵で、そこから山に向かつて踏み固められた土の道が続いている。おそらく畠仕事や放牧に向かう者達の使う道なのである。そして嵐を導いてきた音も、確かにその先から聴こえてくる。

「さて、……行くか」

（なんなんだ、一体こいつらなんだってんだよ――――――！）

『棗の木』を飛び出してきた戦士たちは、かなり混乱していた。

各自、経験に差はあるものの、いずれも腕に覚えのある者たちばかりである。店内での喧嘩に売り言葉に買い言葉で飛び出してきてしまつたとはい、それはまったくの衝動ではなかつた。自分たちの能力には些か以上の自信を持つていたからこそ、あの時投げつけられた『木偶の坊』『役立たず』の言葉に反発したのである。そして自信があつたからこそ、こうして外に出てきてしまつている。しかし今、その自信が揺らぎ始めていた。

「限がないぜ……」

大剣を握つた男が、大きく息を吐く。手に親しんだ剣でさえ、今は重く感じられる。時間的にはそんなに経過していない。いつもならば疲労など感じるはずもない。しかし今は剣を構えることさえつらいと感じてしまう。集中力も途切れがちである。

宙を舞い、攻撃を仕掛けてくる蝙蝠たちは、その数をやや減らしたように見える。しかしそれでも大群であることには変わりがない

し、こちらが疲労しているのに比べて、まったくその動きに衰えが見られない。明らかにこちら側が翻弄されている。加えて蝙蝠の特徴。よみにくい行動。体の大きさ。黒く不吉な色合いに不気味な印象を与えるその姿。全てが攻撃の腕を狂わせる。

「どうすりやいいつてんだよ…」

圧倒的に不利な戦況。しかし彼は逃げることはできなかつた。それは彼の自尊心プライドが許さなかつた。そしてまた、戦う力を持たない者を守る、という彼の戦士としての誇りにかけても、今の状況に背を向けることは、少なくとも彼にはできなかつた。

集中力に欠けた彼の耳が、空を切る音を捉えた。はつと顔を上げようとしたとき、いきなり彼は背後から突き飛ばされた。動転したままの彼の回転する視界に、長い黒髪の後姿が割り込む。その人物の細身の刀が鋭く空を裂く。ちつと何かが弾けるような音がして、僅かに赤い血煙が空に散る。

ぎやあぎやあと耳に煩い泣き声を上げながら蝙蝠が急上昇していった。その右の羽が不器用に羽ばたいているところを見ると、どうやらそちらに傷を負つたものらしい。微かに舌打ちをした人影が、彼を振り向く。顔に落ちかかつた長い黒髪を煩わしそうにかきあげる、美しいその人物を、彼は知つていた。

「あ…あんた…」

名を呼ぼうとした言葉を、鋭い言葉が遮る。

「ぼうつとしてんじやないよ！」

秀麗なその容貌に相応しくない言葉遣いも、よく知つたものであつた。

「すまん…おかげで助かつた。礼を言ひ。紅珠」

「礼なんていらない。それよりもとつとと立て

紅珠の言葉に苦笑しつつも、彼は立ち上がつた。

「あんたも出てきたのか」

問うと、紅珠は微かに眉を顰めた。

「…ほつとけないからな」

その言葉にほんの僅か含まれた不本意そうな感情に、彼は少々意外
そうな視線を返す。その視線を感じたのか、紅珠が彼の目を見上げ
る。

「私が出来るまでもないと思っていたのだ。黙つて待つていれば奴ら
はどこかへ行ってしまうだろうから。確かに異常事態ではあるが所
詮は動物の行動。本能的な行動を人間の力でどうこつできるもので
はない…少なくとも、おまえもそう考えていたのである?」

類稀な美貌を至近距離に目にして、彼は些か動搖を覚える。普段
は特に意識することのない、僅かに赤みがかつた美しい瞳に、思わ
ず魅入られてしまつ。　どこか高圧的な言葉にも不快感を感じな
いほどに。

「嬰巾^{インジン}。私はあなたのことを…少しさ知つてゐる。あなたは腕力の
みの考え方無しの人ではない。……そうでしょ?」

紅珠はそう言って、軽く微笑みを見せる。同時に少し和らいだ口調
に、彼　嬰巾の理由のない緊張がほぐれる。

「ありがとうよ、紅珠。…だが、あの時頭に血が上つっていたのは事
実だからな。　あんたは、それで出てきたのか。俺たちが飛び出
してきちまつたから」

「それもある。しかし少々悠長に構えてもいられなくなつたのでな

…

今度は明らかに眉を顰めて、紅珠は言つ。そして店内にまで蝙蝠
が侵入してきたことを手短に説明する。

「なるほどな。そりやあんのんびりしてられねえ…でも、なんか手立
てはあるのか?」

その問いには答えず、紅珠は早足で歩き始めた。嬰巾は慌ててその
後に続いた。紅珠はちらりと振り返つたが、無言で歩を進める。

「…この辺りに術士か呪言士はいないのか?」

紅珠が振り返らずに問い合わせを発する。

「そりやあいてもおかしくはないが…どうしたんだ?」

「ちなみにあなたは?」

「俺か？俺は…多少明かりを灯すぐらいならな…」

その答えに紅珠がくるりと振り返った。

「“火”が使えるということか？」

嬰巾が頷くと、紅珠は少し考えるように俯いた。そして辺りに目をやつて、一軒の民家に目を止めた。

「…！紅珠、また来た！！」

嬰巾が紅珠に鋭い言葉をかける。その言葉に紅珠は素早く周囲に鋭い視線を投げて確認すると、タイミングを計つてその場を飛び退つた。嬰巾は紅珠とは反対側に飛び退きながら剣を振るが、ひらりとかわされる。その間に、紅珠は更に跳んで民家の壁際まで退く。その民家の壁際には三つの甕が並べられていて、しつかりと木の栓がしてあつた。それを紅珠が手早く開けて中身を確かめる。甕の中の液体は黄味を帶びてとろりとしていて、仄かに甘い香りがした。紅珠の思った通り、それは油であつた。

そのことを確認するが早いが、紅珠は自分の着物の裾を少し裂いて取り、それを甕の中の油に浸す。そしてその甕を抱えて立ち上がつた。ちなみにその甕の大きさは紅珠が胸に一抱えするほどもあり、重さは幼児ほどもある。それを軽々と抱え上げができる紅珠は、やはり見た目でははかれなかつた。

一連の作業の間も目で追つていた嬰巾の方に向き直ると、凛とした声を張る。

「嬰巾！」

呼ばれて嬰巾が振り向く。

「あなたの火は飛ばせる！？」

突然の問いに嬰巾は面食らうが、頷く。

「少しなら飛ばせる。それがどうした！？」

その答えに紅珠は満足そうに頷いた。

「ならば手を貸してくれ。私が合図したらこれに火を！」

そう言って手の中の油に浸した布きれを示すと、答えを待たずに紅珠は行動に移る。

甕を抱えたまま紅珠は駆け出し、表の通りまで出る。わけがわからぬまま、嬰巾もその後に続いた。少し開けた場所で紅珠は立ち止まり、嬰巾に視線を向けると手の中の布を示して放り投げた。

「嬰巾！頼む！」

言いつつ、その後を追うように甕の中の油を撒く。嬰巾が指先に生み出した火の玉を布に向けて放つ。宙に弧を描いて落ちる布が一瞬にして燃え上がる。炎の塊となって地面に落ちる布に、弧を描くよう撒かれた油が触れる。炎は一気に回り、燃える帶となって地面に落ちた。更に紅珠は甕の中に残った油を地面にたらし、何かの文字のようなものを書く。その文字にも炎が燃え移る。

嬰巾がその場に駆けつけたときには、紅珠の作業は全て終わっていた。直径2メートルくらいの大きさで燃える炎の側で、さすがに大きく息を吐きながら、紅珠が嬰巾を迎える。

「…何をしたんだ？ 紅珠」

嬰巾が問うと、紅珠はそれには直接答えず、近くの木を見上げる。そちらに目をやった嬰巾はギョッとした。背の高い木の枝が黒々と膨れ上がるほど、蝙蝠がたかっている。嬰巾は思わず腰の剣に手をかけて後退ろうとするが、紅珠はじっとその場に立つたまま動かない。そしてじつと木にたかっている蝙蝠たちの様子を見つめる。

すると異変が起こり始めた。木に黒々とたかっていた蝙蝠たちの動きが、急にせわしなくなってきた。ざわざわと不吉な羽音がどんどんと大きくなつてくる。周囲にいた者たちも異変に気付き、思わず視線を紅珠と彼女の見つめる木に向ける。

「おい紅珠…」

その場の妙な緊張に耐えかねたように嬰巾が紅珠を呼ぶ。しかし紅珠は何も感じないかのように身動きすらしない。炎は相変わらずごうごうと燃え上がっている。そして紅珠の見つめる先で、木にたかっていた蝙蝠たちが一斉に飛び立つた。

「…！」

反射的に剣を抜いた嬰巾は、しかし蝙蝠たちが奇怪な叫び声を上げ

ながらふらふらと飛び去つていくのを見て、呆気にとられた。

「ふう」

紅珠が息を吐いて肩の力を抜いた。蝙蝠達はふらふらと狂つたよう互いにぶつかり、木や家屋の屋根に激突したりしながら逃げるよびに飛び去つてゆく。やや呆然としたまま、嬰巾が紅珠に近づいた。

「…何をやつたんだ？ 紅珠」

問うと、紅珠がゆっくりと振り向いた。

「見た通り。火を焚いただけだ」

「それは見ればわかる。だが何だつてそれだけで奴ら、逃げ出していつたんだ？」

重ねて問うと、紅珠が嬰巾に歩み寄る。そして背の高い嬰巾を正面から見上げてくる。二度目ではあるがやはりその美貌を至近距離で見つめるのは心臓に悪い、と嬰巾は思つた。紅珠は真っ直ぐに嬰巾の瞳を見上げながら言つ。

「ちょっとした思い付きだつたのだ。蝙蝠は光や熱を嫌う。だからもしかしたら炎には近づかないのではないかと。…まあ、ここまで威力があるとは正直思つていなかつたのだがな」

最後は苦笑のような表情になつた紅珠は、ふつと目を伏せると再び顔を上げる。

「どうやらこれは効果があるらしい。退治するまではいかなくとも多分追い払うくらいはできるんじやないか」

「そうだな…確かに1匹1匹切り捨てるよりはよっぽど確かだな…」

嬰巾が頷く。紅珠も頷いてみせた。

「やつてみる価値はあると思つ。頼めるか」

「俺にか？」

嬰巾が目を見張つて紅珠を見下ろす。

「頼む……幸い、皆も見ていたみたいだし」

紅珠が周囲に視線を向ける。道のあちこちで傷だらけの男達が呆然とした表情でこちらを見つめている。

「手分けすれば何とかやつらを町から追い出せるんじゃないかな？」

紅珠が嬰巾に視線を戻して口許を緩めてみせる。その表情に、なぜだか嬰巾はほつとする。

「そりだな……で、おまえはどうするんだ？」

「私は私でやる。どこにやつらが入り込んでるかわからないからな。だか嬰巾はほつとする。

「頼んだ」

そう言つてさつさと踵を返す紅珠に、嬰巾が追いつめつに声をかける。

「あ…おい、火は何でもいいのか？」

「ああ、なんでもかまわない」

紅珠は一度だけ振り向いて答えると、駆け出していった。

「……何か、訊きたいことがあったような気がするんだが」「どことなくぼんやりしたような頭をぶるぶると振ると、嬰巾は早足で歩き始めた。

毎日中に飛び回る異常性。奇妙に執拗な攻撃性。

炎を嫌う習性。そしてもう一つ。

「…認めたくないけれど、多分間違いないのだろう…」

空に視線をやって蝙蝠の群れの向かう方向を確かめながら、紅珠は町を駆け抜けていく。

そのことに気がついたのは、おそらく偶然であった。『棗の木』で襲われた女性を助けようと蝙蝠を切り捨てた後、その場を立ち去ろうとしたとき、ふと床でもがいでいる蝙蝠の姿が気になつた。だから確かめた。そして彼女が得た結論は、非常識でにわかには容認しがたいものであった。しかし、可能性が1でもある限りは、それをまったく切り捨てるのは愚かなことであると彼女は考えていた。

「この分だと…向かう先は山…か」

それはある程度予想できていたことで、紅珠は不審には思わなかつた。

山に入る道に出るため家の角を曲がって、紅珠は奇妙なものを見た。地面に蝙蝠たちが落ち、その真ん中に少年が一人座り込んでいる。

「……君、どうしたの？」こんなところで、「紅珠が声をかけると少年が顔を上げた。頭に巻かれた布に僅かに滲んだ血が痛々しいものの、少年は元気なようであつた。怯えてもいないうで、なんとなく紅珠はほつとする。

「これは、結界か？」

紅珠が尋ねると、少年は頷いた。

「君がかいたの？」

「ううん。俺じゃない。変なに一ちゃんがつくつたんだ」

少年が頭を振つて答える。紅珠は頷いて、更に尋ねる。

「私も入つていいか？」

少年が頷くのを見て、紅珠は結界内に足を踏み入れた。

「！――！」

結界内に踏み入った瞬間、紅珠の全身を風が包み込んだ。否、正確に言えばそのような感覚があつたということである。見えない壁ひとつを隔てて、外と中ではまったく空気が違つた。

（気がつかなかつたけれど、ずいぶん空氣も汚されていたのか…）

それとも単に結界内の空氣が清められているということか。紅珠は瞳を閉じて深く息を吸い込んだ。

沙漠の乾いたひりつく空氣とはまるで違う、肌に柔らかい穏やかな空氣。例えるなら深い森の中のような、濃い緑の水分を含んだ風。しかし森で感じるような重さはあるでなく、あくまでその風は軽く爽やかに、足下の大地から天へと吹き抜けていた。それは紅珠にとつては初めて感じる感覚であった。しかし今まで感じたどんな空氣よりも穏やかで心地良かつた。

（こんなに初步的な結界なのに。何故こんなにも美しい空間を造ることができるのだろう）

「ねえちゃん？どうかした？」

呆然としたように立ち去へしている紅珠に、少年が不安そうに声をかける。

「ああ、いや、なんでもない」

紅珠は氣を取り直して少年に微笑んでみせる。

「この結界が、どうかしたの？」

どうやら先ほどの紅珠の態度が少年に不^セ感を^{シテ}しまつたようだ。拙いことをしてしまつたと紅珠は反省した。

「そんなことはない。この結界はずいぶん立派なものだ。……あなたもこの中にいて、怖い思いはしなかつたでしょ？」

紅珠は少年の目線に合わせてしゃがみながら、微笑みかける。紅珠の柔らかい聲音に、少年もほつとしたように頷く。

「うん、あいつら全然入つてこれないし、なんとなく気持ち悪かったのも治つたし、何かすげえ安心できるんだ。変なに一ちゃんだけ、実はすごい奴だったんだね」

「その“一ちゃん”はどんな人だったの？」

紅珠の何気ない問いに、少年が答える。その証言が告げる男の特徴に、紅珠は心中目を見張る。

瘦身短躯。赤茶けたくしゃつとした髪に十代半ばの少年にしか見えない容貌。左手には一本の杖。

心当たりがありすぎて、その意外性に紅珠は驚かざるをえない。しかしそんな感情は微塵も表に出ることにはなかつた。

「で、その人はどこへ行つたの？」

乱れた長い髪を手早くまとめ上げながら、紅珠は更に少年に尋ねる。

「あつちの方…多分、山に向かう方だと思つ」

よくわかんないけど、と付け加える少年に、紅珠は頭を振つた。

「いや、かまわない。……では、私はもう行くから。君はもう暫くここでじつとしているんだ。いいね」

髪の毛をまとめ終えて、紅珠は立ち上がつた。瞬間、少年の表情に僅かに不安な影がよぎるのを見て、紅珠は軽く微笑んで見せる。

「大丈夫だ、もうすぐこの変なことも終わる。終わらせてあげ

るから。だからもう少し、我慢してくれ

「…本当に？」

「ああ。嘘は言わない」

頷いてみせると、紅珠は結界を出た。そして先ほど結界を張った人物が去つたという方向へと駆け出した。

禾峯露は沙漠の中継地として賑わっていたが、さほど大きな街ではないので商業のみでは生活は成り立たない。そこでこの街に定住する人々は、基本的に農業と放牧で生計を立てていた。この付近は乾いた土地ゆえ、低地に耕地を求めるのは非常に難しい。しかし禾峯露は背後に峻険な山を抱えており、そこが耕地や放牧場となつていた。山の下から階段状に畑が作られ、登るのが困難になる辺りから柵が設けられ、そこから上、森林限界までが家畜の放牧場となつてている。

しかしそうは言つても拓き易い場所のみが拓かれているわけで、山全体が切り拓かれているわけではない。ほとんど未開といつてもよい森が、耕地や放牧場の脇に黒々と横たわっている。そしてそちらへ向かつた嵐は、藪の中に身を隠して、大きく息をついていた。

「むづ〜〜ちと参つたの〜〜」

咳いてふうっと溜息をつく。藪は身を屈めた嵐がちょうど隠れることができるくらいの高さで、外からは様子を窺うことができなくても中からは外の様子がだいたいわかる。そして溜息をついて天を仰いだ嵐の視線の先、鬱蒼と茂る木々の間を飛び交う蝙蝠の様子が、嵐にはよく見えた。

「まあ、予想はしておつたとはい〜〜ちと数が多くすぎる。これでは動くに動けんのう〜〜」

聴こえるか聴こえないかの笛の音を頬りに山の入り口まで来た嵐は、森に入る獸道を選んだ。どう考へても畑や放牧場に怪しい輩がいるとは考へにくかつたからである。

今は日中である。畑仕事や放牧場に出ている者もいる。そんな人目につくところに見慣れぬ余所者がいたりしたら、いくら外来客が多く、それに慣れている禾峯露の住民であつても何者か、何をしているのか、怪しむに違ひない。何かことを起こそうとするのにそん

な危険を冒す必要は全くない。普段ほとんど人の入らない森という好都合な場所があるのであるのだから。

その嵐の判断は恐らく正しかった。森に一步足を踏み入れるなり、氣味の悪い羽音が森中を飛び回っているのがはつきりわかった。奇怪な鳴き声も聞こえる。いくら初めてこの森に入った嵐でも、これが異常な事態だというのは疑いようがなかつた。

最初のうち、嵐は先ほどまでと同様に杖で寄つて来る蝙蝠を叩き落としながら道無き道を進んでいた。しかしながらぶん数が多くすぎた。ただ真っ直ぐ歩くことさえ困難な状況に、嵐は一時休憩を選ばざるをえなかつた。見ると体中、傷だらけである。幸いどれもかすり傷程度であるが、無傷ではないというだけで精神的にも疲労がたまるものである。

「…しかもなんだか気分まで悪くなつてきたの…毒氣にでも当たられたか…」

ふつゝと嵐は大きく息をついた。氣を取り直そうと陣を張つた杖で軽く額を叩く。

結界はこのような場所であつても有効であった。藪の中に身を隠してはいるものの、その気になれば蝙蝠は彼を襲つてくるであろう。それが全くないのは、彼が身の回りに小さく張つた結界のお陰である。しかしつまでもこの中に隠れていっても仕方がない。

「陣を張りつつ前進するというのも手だが…そんなことをしておつては日が暮れるしの…」

恐らく今の嵐の採れる方法で最も安全なそれは、避難するという場合ならば有効である。しかし今はこの事態を收めようとしないのである。そんな悠長なことはしていられない。なにか、別の方法を考えなければならなかつた。

「…わし自身に、結界を張ることは…できんかの…」

嵐は左手に握つた杖をじつと見つめた。

この杖は彼が旅に出るとき、授かつたものである。それまでは、多少使い方を習つたことはあつたが、それも彼の勉強の一つでしか

なかつた。旅に出ると正式に決まり、そして彼の望みどおり、一人で、といつことが決定したとき、この杖を授かつた。

『外の世界は危険だ。お前を守るものはお前自身でしかない。生き延びたくば、この杖を使いこなすことだ』

「…使いこなすというもの?…」

嵐は目を伏せてそっと杖に額を寄せた。こうしているとなんとなく気分が良くなつてくる。呼吸も楽に、疲労も軽く。杖の持つ浄化の力が働いているかも知れない、嵐はそう感じた。

(確か『聖域』の基本定義は「何らかの手段によつて聖別されたもの」。場所や空間に対してもはめると「結界」もしくは「陣」と呼ばれるものになる。しかしものを聖別する]ともできたはず

…ならば)

嵐は両手で杖を握ると、改めてじつとそれを見つめて精神を集中した。精神が集中するほどに意識が澄み、それとともに外界の全てが曇になつてゆく。だんだんとクリアになつてゆく意識の中で、幾つかの道を手繰り寄せる。その中に、彼の求めるものが垣間見えた。(これが…)

嵐はそれに意識を集中する。全て邪なものから聖なるものを分け、別なものとして明らかに区別をする。悪しきもの、邪なもの、全ての穢れを寄せ付けない、聖なる存在。それを、可能とする力。

(それを、我が身に)

強く念じる。一瞬、嵐の意識の中で白い光がはじけ、そして彼は一点に収斂していくイメージを見た。

ゆっくりと、嵐は目を開けた。何とはなしに、全身が軽くなつたような気がする。全身の傷はそのままで、いまだ血が滲んでいたが、その痛みもあまり気にならなかつた。

(…いかが、か ?)

ゆっくりと嵐は立ち上がつた。田を上げて飛び交う蝙蝠たちを見るが、先ほどまでなら姿を見るなり飛び掛つてきていた蝙蝠たちがなんとなく遠巻きにしている。

「こいつ

「うひ

低く、自分に呟くと、嵐は藪から踏み出た。

不穏な空氣は変わらないままであったが、今は進める、そつ嵐を感じた。

(あとは、どこまでもつか、といつ氣もするが)

嵐の周囲を蝙蝠たちが飛び交っていく。真正面から飛びかかってきて、寸前で慌てたように僅かに進路を変える。

とりあえず進むしかない、そう嵐は腹を括ると、足を速めて歩き出した。

山の中の道を歩む嵐の耳に、蝙蝠の羽ばたきに紛れて笛の音が聞こえている。街中にいるときには微かな響きのみしか聞き取れなかつたものが、ここに来て確かな音として聞き取れるようになつていた。その場所に、確かに近づいているのである。

しかしその場所へ近づくにつれ、困難も増える。蝙蝠の群れは既に濃厚な密度をもつて嵐の行く手を阻もうとする。羽音に鳴き声、羽風に乗る息の詰まるよつた臭い。嵐自身はその身を守る結界のために実害といふものはないものの、気分のいいものではない。

(気持ちが悪い…)

嵐は小さく息を吐いた。大きく息を吸い込むこともできない。空氣そのものが穢れているような気さえする。息が詰まって、眩暈を起こしそうになる。

はつとした彼の目に、真正面からつっここんでくる蝙蝠の姿が映つた。目の前に黒い毛に覆われた蝙蝠の腹が大写しになる。思わず嵐は両腕を上げて顔を庇つた。何もぶつかりはしなかつたが、嵐の体が大きく傾ぐ。思わず目を瞑つた嵐の脳裏に何かが小さくはじけるようなイメージが浮かぶ。

(結界…が…！？)

鈍い衝撃。無意識の内にとつた受身のために後頭部強打はなんとか避けたものの、尻と背中をしたたかに地面に打ち付けて、衝撃に息

が詰まる。

「つ……！」

嵐は思わず呻き声をもらす。

「あ……っ！」

そのとき嵐は自分以外の者の声を聞いた。ささつと草を搔き分ける音も聞こえる。嵐が目を上げると、何者かが草を搔き分けて飛びこんできて、地面に転がる彼の手前で大きく跳躍する。そして高く跳んだ空中で、両手で掴んだものを振りかぶる。嵐が見ると、それは大きな松明のようなものであつた。そして低い気合とともにそれを大きく振り回す。炎が大きく弧の軌跡を描いて弾けた。飛び交つていた蝙蝠たちが一際耳障りな鳴き声を上げて一斉に飛び去っていく。きれいに円を描いて飛び散った炎の欠片がちりちりと草を焦がす、その中にふわりと人影が着地する。そして膝を付いた姿勢からゆつくりと立ち上がつた。そしてゆつくりと首を廻らして嵐に視線を向ける。左右の腰に下げられている刀の鞘が僅かに音を立てる。黒いチュニックの背中で無造作に束ねられた長い黒髪。振り向いた顔是非常に整つた端正さで、ただしそこに浮かぶものは實に複雑そうな表情であつた。

「…大丈夫、ですか」

「ああ、うむ」

答えるながら嵐は半身を起こした。したたかに打ち付けた腰が痛んだが、特に怪我をしたわけではなさそうであつた。

「助けられたようだのう。すまぬ。感謝する、紅珠」

「…いいえ。大したことではないから」

ぱんぱんと土埃をはたいでいる嵐を、紅珠は眉を顰めながら見下ろしていた。

「…何か言いたそだのう」

視線を感じて嵐が紅珠を見返す。紅珠は険しい表情で何か言いかけで一旦口を閉じる。それから再びゆつくりと唇を開く。

「…あなた、馬鹿でしょう」

簡潔すぎる言葉に一瞬反応する」とも忘れて、嵐はまじまじと紅珠の顔を見上げる。

「あなた、どうやつてここまで生きていたんです？あなた、戦える人じゃないでしょ。武器も持っていない、体術もさほどではない、あまりにも無防備すぎる。…どうしてそんなまで来たんですか？」

紅珠の口調には容赦がない。呆れとも怒りとも取れる言葉に、内心嵐は苦笑する。しかし彼はそれを表には出れない。

「そういうおぬしも随分とタイミング良く翻つて入ってきたではないか」

紅珠の表情には容赦がない。呆れとも怒りとも取れる言葉に、内心

嵐は苦笑する。しかし彼はそれを表には出れない。

「そういうおぬしも随分とタイミング良く翻つて入ってきたではないか」

紅珠の表情には容赦がない。呆れとも怒りとも取れる言葉に、内心

嵐は苦笑する。しかし彼はそれを表には出れない。

「…別に他意はない。恩を売ろうとも思っていない。成りゆき上だ。…と詫びつか」

紅珠の表情も口調も冷静なものであった。

「正直、ここまで戦えないとは思つていなかつたのだ。一人で店は飛び出していくわ誰にも声をかけずにこんなところまで入り込んでいくわ…」

一つ頭を振つて続ける。

「あなた、ただ無謀なだけじゃないですか」

(…反論はできぬがのう)

嵐は内心苦笑を禁じえない。紅珠の指摘することは一々もつともなのだ。嵐は自分の無謀さを承知の上で、しかしここまで来ている。無謀さは承知しているが、実のところ無策では、なかつたりするのである。

「…戦士どもが頼りにならんから」

嵐がぼそりと呟く。それを紅珠が聞き咎める。

「なに？」

「無謀なのはわしではないであらう。頭に血を上せてんとんばら

ばらに店を飛び出していくわ、その上無策のまま蝙蝠どもに翻弄されておるわ…その上それを見殺しにする奴もあるし。頼りになる者がおらんのでは、非力でもわし一人で動くより他ないではないか

「飄々として嘯く嵐に、紅珠がさつと頬を紅潮させる。

(この人…！…)

しかし瞬間的に上がった体温は一瞬で戻る。平静に戻った心中で紅珠は深く深く溜息をついた。

(…一番係わり合いになりたくない人種だわ)

常に平常心を保ち続ける自分の冷静さを、このときばかりは紅珠は恨めしく思った。そして常に本質を探りそのときの状況に最適の結論を見出そうとする自分の優秀な現状認識分析能力を。

「…で、どうします?」このまま不毛な会話を続けていても意味がないと思いますけど?」

結局先に折れてしまった自分を、紅珠は苦々しく認めた。嵐はそんな紅珠の様子に、悟られないくらい小さく笑みを浮かべると、改めて紅珠に視線を向けた。

「それでおぬし、何故ここに来たのだ?」

「何故…つて」

それは私の方が聞きたい、と紅珠は思った。彼女は嵐を追つてきたわけではない。彼女の行つた先に嵐がいたというだけのことである。

「宿でのおぬしの発言を聞く限りではおぬしは出てこよびに思えたがのう」「う

嵐は紅珠に視線をやりつつ自分の着物の袖を裂いて血のにじむ傷口を縛つて応急処置をしている。紅珠はそつと半眼を伏せて、口を開いた。

「確かに。あのときは外へ出るつもりはありませんでした。でもそういうわけにもいかなくなつたのでね」

嵐が憮然としたような紅珠の台詞に意味ありげな視線を向ける。しかし彼女の表情は読めなかつた。

「最初は本当に放つておこうと思つてたんですがね。別に私が何かする必要もないかと。でもどうやら早々に收拾をつけないとけない状況らしいとわかつたので。ここに来たのは別に思いつきでもないしあなたを追つて来たのでもないですよ。私は私なりに確証を得たからここへ来たんです。この事態を收拾させるためにね」

そこで紅珠は目を上げた。そして嵐に視線を据える。

「私の方こそ訊きたい。あなたはどうしてここにいるのです？」

紅珠の視線は真っ直ぐで、強い。少しの嘘も見逃すまいという光に満ちている。

（… 我の強い奴だのう）

そう思つたが、しかしながら少し楽しいと嵐は感じていた。

嵐がふと表情を変えたことに、紅珠は気がついた。嵐が視線を上に向けた。

「おぬし、聴こえぬか？ わしには笛の音が聴こえるのだが」「え…」

突然の嵐の言葉に、紅珠は少々戸惑いつつも嵐の視線を追つ。

「わしはこいつ考えたのだ。蝙蝠は人間と同様の思考を持つことはない。あやつらはあくまで野生の動物なのだから。その行動は基本的に本能に従つているはずだと。蝙蝠の行動は食料調達に繁殖行動。しかも基本的に草食でおとなしい。小虫を食べるということはあるが他の動物を襲うなどということは聞いたことがない。しかしあやつらは明らかにわしらを攻撃対象としてとらえておる。執拗にわらにつきまとい、戸や窓を破つてまで攻撃を仕掛けてするのがその証拠。これは通常の奴らの行動ではない。では、それは何故か」「… 何者かに操られているとでも？」

紅珠が低い声で言つ。彼女はやや眉を顰めた表情をしているものの、とげとげしい印象は薄らいでいた。

「そうだ。おぬしも知つておらう？ 蝙蝠の特徴。奴らの耳は非常に発達しておつてほんの微かな音でも聞き分けられる。そしてそれを互いの意思疎通の手段としておるということ」

「超音波、でしたかね。通常私たちの耳に聞こえるよりも遙か高音域の音」

紅珠の受け答えに、嵐は満足していた。

（思つた通り、こやつ頭が良いわ）

知識があるというだけではなく、理解力にも優れてい。

「なるほど、音か……」

一方、紅珠は何やら考え込むように視線を落としている。嵐が黙つて見ていると、紅珠はやあつて視線を上げた。素早く右の手が腰帯の間から一本の細いナイフを抜き出す。そしてそれを一つも無駄のない動きで投げる。さすがに驚いて目を見開いた嵐のすぐ脇をナイフが飛び、どす、という鈍い音と小さな悲鳴が彼のすぐ後方で起つた。嵐が振り向くと、地面に深々とナイフの刺さった蝙蝠が一匹、落ちていた。紅珠は無言でそれに歩み寄ると、まだぴくぴくと蠢いているそれにもう一度ナイフを深く突き立て、それから抜いた。そして嵐を振り返る。

「…これを見ていただけます？」

紅珠はナイフで蝙蝠の額の辺りを示している。嵐はかなりこわごわ屈みこんで、彼女が示す辺りを見る。紅珠は額の辺りにナイフの腹を当て、ぐ、っとそれを押しやる。それにつれて黒い剛毛に覆われた肉が僅かに動いた。その下から現れた、硬質な濡れた黒。

「…目玉？」

嵐の呟きに、紅珠が小さく頷いた。

「『三眼飛鼠』という名を知っていますか？」

紅珠の告げた名に、嵐は少し記憶を辿る。

「三つ目蝙蝠、ともいうようですけど」

「サンガン…おお、確か西方の国の神話にその名が現れておつたな。邪悪な神の手下であつたか」

嵐の答えに、紅珠は数度目を瞬かせた。

「よく知つてますね」

「と言つても知つておるのはそのくらいだ。どこの国の中であった

か…今はちと出せん。ほんの下つ端の幻獣であるといひにどべ
らいしかのう…」

それでもそれだけ知つていれば大したものだと紅珠は思う。しかも彼は『三つ目蝙蝠』ではなく『三眼飛鼠』の方に記憶が引っかかる。更にそれが西方の神話であるといふことも知つていた。だから、彼女は素直にその思いを口にする。

「いえ、それだけ知つていれば大したものです。大抵の人は知りませんよ…『三つ目蝙蝠』なんて言つてもそれがどんな存在であるかなんて、知らない人がほとんどでしょうね」

言いながら、紅珠は軽く肩を竦める。嵐はそんな彼女を興味深そうに見る。

「おぬしはよく知つておるのか？」

「よく…というほどではありませんけど…」

軽く首を傾げてみせながら、紅珠は手短に説明した。

『三眼飛鼠』は西方から吐蕃に伝わってきた神話の中に登場する。ちなみにそのストーリーは吐蕃では断片的にしか知られていない。恐らく伝わってくる途中でそのほとんどが散逸してしまったものと思われる。元のストーリーを探ろうにも、どうやらその神話の語らっていた国は既に滅びて久しいものようだ。原本が喪失してしまっているらしい。当然『三眼飛鼠』とは吐蕃の言葉である。本来その国でどう呼ばれていたものか、今でははつきりとはわからない。それはともかく、三眼飛鼠はその名が示す通り、三つ目の蝙蝠である。その姿は一見、普通の蝙蝠と変わることはない。しかし全身くまなく黒くて短い、硬い毛に覆われており、三つの目も黒い。それはやはり普通の蝙蝠とはやや異なつており、不気味である。そしてその気性も、異なつている。

三眼飛鼠は邪神に仕える幻獣であり、基本的には闇を好む。しかしそれは光の下では全く生息できないということではない。ある程度の条件が整えば、光の中でも活動できるのである。それは彼らが邪神の手下の中でも一番の下つ端であるということだが、かえつて良

い方に働いた結果でもある。その神話の中では邪神は光とは正反対の暗黒の存在であり、光を最も苦手としているのである。ゆえに、その神話の中で三眼飛鼠は邪神の先鋒という役割が与えられている。「世の乱れる時、三眼飛鼠が蔓延り始める。不安と恐怖と闇の種が撒かれ、人心が乱れ始めたとき、邪神が動き出す」と、その神話では語つていいようですね。うろ覚えですけれども

「にしてはよく知つておるのう」

嵐の言葉に、紅珠は苦笑を返した。

「私はこの沙漠で生きてきましたから。西の情報にはかなり詳しいんですよ」

それにしても詳しいと嵐は思った。嵐は今までにかなりの量の本や資料を読み漁り、知識を蓄えてきた。それは地理や歴史に始まり、算術や天文学、更には建築学や力学、植物学や地質学に至るまで、この世のありとあらゆる知識を読み漁り、蓄えてきた。その範囲は大陸の東西を問わない。全て、知り得る限りのものを吸収しようとしてきた。そのことに関して、彼は自分自身に絶大な自信を持つている。しかしそんな彼にしても、紅珠の語る西方の神話は、未知の分野であった。

(いかんいかん、今はそんな場合ではない)

思わず知的好奇心が疼きだしている自分を、嵐は諫めた。その間にも、紅珠の話は続く。

三眼飛鼠の特徴は何よりも三つの目。そして明るい毎日中でも活動できること。そしてもう一つ。

「火を嫌うのです」

「火？」

「そう、火というか、炎です。それは特に三眼飛鼠に限った特徴ではありません。邪神に仕えるものは並べて炎を嫌います。それは邪神が炎を最大の弱点としていることによるものだそうですが…」

「それで、そのトーチか」

嵐が紅珠の左手に目をやつた。紅珠が頷く。

紅珠は山に入る前に手近な道具でトーチを作っていた。やや長めの棒に布を巻きつけて固定し、それにたっぷりと油を染み込ませて火を灯す。最も原始的で簡単なトーチである。棒はその辺りに落ちていたもの。布は見当たらなかつたため、自分の着ていた上着を使つた。ややもつたひないようではあるが、こいつら点で彼女は思い切りが良かつた。

「それで、今やつらは近づいてこないのだな」

嵐が上空を振り仰ぐ。嵐の張つた結界は既に壊れている。やはり自分自身に張る、といふのはかなり無理があつたようで、集中力の途切れた瞬間、自己の中で何かがはじけてしまつたのを、嵐は感じた。にも関わらず、こつして彼らが話している間、蝙蝠はほとんど近づいてこよつとしない。

「時間の問題ですけどね。このトーチもそう長くはもたない。その前になんとか根本的な原因を取り除かなければ…」

紅珠が形の良い眉を顰める。

「おぬしには原因がわかつておるのか？」

嵐の言葉に、紅珠は暫く迷うよつた表情をしてから、頭を振つた。
「はつきりとは…何しろ、幻獣の話ですから。基本的には現実世界には存在しないものでしよう？少なくとも現実的に考えれば」

「だが今のこの状況は夢でも幻でもないぞ」

紅珠は頷いた。神話の話を全面的に歴史的事実に直結させることは、彼女はしない。しかし直面している事象を無視してまで「理性」や「常識」にしがみつくほど、頑なでもなかつた。

「こいつらが三眼飛鼠であると考へると…恐らく、近くにこいつらを操つているものがいると思われます」

嵐が強い視線を紅珠に向ける。

「それも神話の話か

「…そうですね」

紅珠は肩を竦めてみせる。

「もちろん、そう思つたからこそ、私もここまで来たわけですから

「…その辺はわしの判断とさほど変わらないと考えてよいのか？」

嵐の言葉に、紅珠は少し間を開けて、頷いた。

「そうですね。変わらないでしょう。笛の音には私は気付きませんでしたし…」

もちろん今では紅珠にも嵐の聞いていた音が聴こえている。それにしても街からこの音を聞き分けっこまで来たのだとすれば、かなりの集中力、かなりの聴覚である。恐らく嵐の感覚が並外れて鋭いのだろう、と紅珠は思う。

「…それに、間違いなく何かの気配がありますしね」

紅珠がすっと視線を動かす。その瞳からは先ほどまで嵐と話していたときのやや穏やかな光は消え、一転して鋭く、冷たいものに変わる。その視線の先には木々の間に隠れて深い藪が見える。そしてその先にやや草のはげた、土や岩の剥き出しになつた斜面と、窪んだ影。

「洞窟、かな」

「恐いく」

短い会話が交わされる。

「行くか」

嵐が立ち上がるとして、僅かによろめいた。紅珠がはつとして腕を差し出そうとする前に、何とか嵐は杖で体を支えた。

（先ほど腰を打ったせいか？しかしもう、ほとんど痛みはない…貧血を起こすほど出血もしておらん…では、この妙な息苦しさは…）

紅珠はそんな嵐の様子を眉を顰めて見つめていた。そして探るように視線を周囲に向ける。そして何かに気がついたかのように目を見張り、少し考え込む。

「大丈夫ですか？…ええつと…」

紅珠は嵐を呼ぼうとして、まだ名前を知らなかつたことに気がついた。

「……ああ、嵐だ。そなたの名前は知つておる。この辺りでは沙漠の戦士・紅珠とは随分有名人であるそつだからの「つ」

「それは光榮です。それで 嵐さん？これを……」

「嵐、でよいよ」

言いつつ、紅珠が腰に下げた袋から取り出したものを受け取る。それは半透明の琥珀色をした小さな豆のようなものだった。

「体がだるいのではないですか。これで少しさは楽になると思います」言いつつ、紅珠は自分自身も同じものを口中に放り込む。それを見て、嵐もそつとそれを口に含んだ。ほのかな甘味と苦味が口中に広がる。飲み込むんですよ、との紅珠の言葉に従つて、嵐はその苦味を飲み込んだ。

「薬丹か、これは」

「そんなものです。すぐに効き田は顯れると思いますよ」

紅珠の言葉の通り、嵐は全身の氣だるい感じが薄らいでいくのを感じた。動いても眩暈を感じない。

「では、行きますか」

紅珠が右の手に刀を抜くと、草を搔き分けて歩き始めた。その後に、嵐が続く。紅珠の手にしたトーチの炎が近づくと、行く手の蝙蝠たちが慌てて逃げ去り、遠巻きに騒ぎ立てる。

行く手に森が途切れ、藪に半ば隠された洞窟が見えてきた。

妙だ、と嵐は感じていた。空気が濁んでいる。ほとんど田視できるほどに空気の粘度が高まり、胸を圧迫していく。

(これが邪神の眷属の生息する空気なのか)

紅珠の語る話が真実なら、今自分たちの周囲を飛び交うものは現実には存在するはずのない幻獣どもである。幻獣とは神話や民話の中に登場する異形の怪物ども。人の意識の闇に住まうもの。それが顯在化するとは、いかなる事情によるものなのだろうか。思考に沈みそうになる嵐の鼻先を、重い空気がよぎる。嵐は手で空気を搔き回すと、ふうっと息を吐いた。不快な空気が嵐の感覚をひどく刺激する。甘い香りがする。甘く重く、頭の芯をちりちりと揺さぶる香り。

(『危険』、だな)

特に理由はなく、嵐の感覚はそつ判断する。氣をしつかりと保つていないとどうなるかわからない、そう感じさせせるものが、この香りにはある。

「のう、おぬし大丈夫か? この香りは 」

そつと傍らの紅珠に声をかける。紅珠はその声にちらりと視線を向けたが、何も言わず軽く頷いただけで再び視線を前方に戻した。その視線が鋭く数十歩先にまで迫った洞窟に据えられている。嵐の感覚を刺激する気配はそこから流れてきている。そして恐らく、それは紅珠も感じているのであろう、と嵐は思う。嵐に見せている紅珠の横顔は戦場で敵に相対するものの、それであつた。

ふと紅珠が重心を低くして嵐を庇うように身構えた。その視線の先で洞窟の中の影が蠢く。ずるり、ずるり、と重い衣擦れの音がして現れたのは濃色の裾長い衣を身に纏つた、一人の男であつた。森の中の薄暗い明かりの中でもそれとわかるほどに顔色に冴えたものない、どころく虚ろな目つきをした男であつた。しかしその虚

ろな目つきの奥に燈るのは虚脱の光ではなく、暗い情熱に狂熱する不吉な熾火であった。薄く肉の削げた頬の陰とだらしないと言えるほどに醜く笑みの形に歪んだ唇が、一層その表情に不吉さを副えているように、嵐には思えた。

血色の悪い薄い唇が、更に歪められた。

「…何ぞ物騒な気配よ。他者の住まいを無断で搔き乱そうとするは何處の無粋者か」

抑揚に乏しい声による嘲笑が歪んだ笑みの口許から吐かれる。その一言毎に周囲の毒気が濃くなつていくような気がして、嵐は我知らず胸元を押さえていた。と、紅珠が半歩身を進めつつ声を張った。

「無粋で結構。お前に粋人と認められることほど不愉快なことはなさそうだ。他者の土地を無断借用しておきながら平氣で主人面している者に礼儀をはらう謂れも知らん。ましてや口の下に晒すこともできんいかがわしい術に身を捧げる輩などにな！」

その場の空気にそぐわない、いつそ爽快なほどの台詞に、その場の空気が止まる。洞窟を背にして立つ男の虚ろげだった目が僅かに見開かれ、口が意味もなく開閉しているのを見て、嵐は思わず吹き出していた。

無理もない。黙つていれば貴族の深窓の姫君と言つても通用するほどの端正な美貌と今までに聴いたどの歌い手よりも美しく澄んだ耳に心地良い声音と、そしてまるで市井の、しかも男の違うような悪口と、それを裏切るような明朗で爽快な氣質の溢れるその雰囲気。その全て相反するような要素が一緒くたにぶつけられれば、誰だって面食らうであろう。特にそれらの要素のギャップがあまりにも激しい時には。

(本当にこやつ、黙つておれば佳い女といえるであろうこのうわざと意地悪くそんなことを思つて、嵐は口許を緩めた。空氣の不快さに参りかけていた神経がすっかり復調しているのを感じる。

一方、男の方はペースを狂わされて頭に血を上せたらしい。

「おのれ礼儀を知らぬ雌犬めが。我が神聖なる務めを愚弄するか…」

相変わらず抑揚に乏しい言葉であつたが、とにかく口に嬌が入っている。

「無禮で結構。ついでに犯行も白状してくれて手間が省けた。そういつことで迷惑しているんだ。おとなしく觀念してくれるとありがたいんだが」

につこりと紅珠が笑つてみせる。もちろんわざとである。それでも整つた顔立ちの笑顔は当然美しい。ある意味嫌味なほどの挑発に、嵐は感心する反面、呆れた。絶対に、確信犯である。

「……おのれおのれおのれえ！……」

額に青筋を浮かべた男が甲高い声で怒鳴り、衣の内から何かを掴み出した。それは両の掌で捧げ持つくらいの大きさの、白く丸い陶器のようなものであった。男はそれを血管が浮き出るほど両手に強く握り締めると、ぎりぎりと歯を軋ませて一人を睨みつける。

「……いや、なんともお約束通りな男だのう。ボキャブラーの貧困さもいつそ哀れなほどにのう」

嵐が溜息をついて呟く。

「仕方ないのでは？ 所詮は『えられたことのみ全うするだけで精一杯な三下ですから。豊かな精神性を期待するほうが間違つてしまふよ』

嵐の呟きに紅珠が返す。

「いやしかしこに至るまでの苦労を考えればのう、もうちょっとましな奴を期待するではないか」

「…苦労したのはほとんどあなたですけど」

シチュエーションを無視したかのようにのんびりと言葉を交わし合つて人に、男の方は我慢の限界が近いようである。全身を震わせ、歯軋りが聞こえるほどに奥歯を噛み合わせ、手にしたもののは白い陶器のような滑らかな表面に爪を立てる。頭には血が昇りきっているらしく、血色の悪い肌が、じす黒く染まつている。

「……おのれ馬鹿にしあつてこのむしからどもがああ————！」
男が甲高く叫び、手にしたものを頭上高く差し上げた。そして息を切らせて続ける。

「死ぬがよいわあ――――――――――――――

「……ちよつとむかつくな」

ぱつりと呑くと紅珠は一旦深く身を屈め、へりず口をたたきながらさりげなく計っていた間合いを一気に跳んだ。

「あからさまにわかりやすい奴よのう…」

紅珠同様、無駄口の間にスタンスを整えていた嵐が、杖を両手に構え、精神を集中させた。呼吸を整えて一旦目を閉じる。そしてかつと目を開くと同時に気合を籠めて杖で地面を打つ。

「撥!^{はつ}！」

強い白光が炸裂する。上空から嵐めがけて飛びかかるうとした蝙蝠三眼飛鼠たちが強い浄化の光に焼かれて悲鳴を上げ、そして霧散していく。

「あれは外法士だ」

殊更に無駄口を叩いてみせながら、その合間にそつと嵐が囁き声で断言した。

「外法……なるほど……それで三眼飛鼠が……」

嵐の言葉に紅珠が頷いた。

外法とはいわゆる禁術と呼ばれるものである。あまりにも危険すぎるもの、倫理上問題があるもの、または存在だけは知られているものの、実際の使用法ははつきりとは知られていないものがそう呼ばれている。反魂法や鬼獣培養法などが知られている。

「もちろんどのような術を使つたのかはわからぬが……

「今追及しても詮無いことです」

外法の知識は、当然のことながら一般には深く知られていない。知らないものを材料もなく追求するのは無駄なことである。

「捕らえればいいのでしょうか？」

短く断言すると、紅珠は少しだけ思案した後、嵐にトーチを差し出した。

「持つていいください」

「うしろおぬしちゃべりあるのだ……」

風が眉を顰める。紅珠の意図はなんとなくわかる。恐らく今の間合いなら一、三歩で紅珠は外法士に届く。恐らくこのまま切りかかるつもりだろう。それは構わない。しかしこのトーチを手放すと紅珠は身を守るものがなくなってしまうのではないだろうか。

そんな嵐の懸念を読んだのか、紅珠はちらりと視線を嵐に向けて、微かに頷いてみせる。

「それよりも恐らくもう一人いる。気をつけて……」

紅珠が僅かにぐつと身を沈め、全身に力を溜める。

「むしけらどもがあ———！死ぬがよいわあ———！！」

! !

外法士が叫び、手にしたものを持ち上げる。紅珠はそれに鋭い視線を据えると、次の瞬間、大きく踏み込んだ。

「…ちよつとむかひくな」

外法士なんぞにむしけ

外法士ながらそばに立時はれりされる覚えはないのだが…から
りと紅珠はそんなことを思つ。外法士までの距離は正確に二歩であ

る。

外法士は女がつっこんでくるのを見た。それを認めて彼はそちらに向き直ろうとした。しかしそれよりも早く、女の姿は彼の目の前に迫っていた。慌てて呪文を唱えようとするが、既に遅かった。一瞬彼の視界から女が消えたと思うと、ひゅっと空を切る音がして白い法具を掴む両手に鋭い衝撃と痛みを覚えた。

「ああやーーー！」

外法士が悲鳴を上げて飛び上がる。低く身を沈めていた紅珠は僅かに舌打ちをした。その右手には僅かに血のついた長刀が握られている。外法士の右手は砕かれ、半ば以上切断されていた。左は数本の

指が砕かれていた。しかし法具はその両手がクッショーンになつたためか、あるいは表面の滑らかさが幸いしたのか、完全な破壊は免れていた。しかし全体に深く亀裂が入り、法具を破壊しようという紅珠の目的は半ば達せられているようであった。

外法士の恐ろしさは、何をするかわからないというその能力の未知ゆえの恐怖である。しかしその行使するものが術である以上、紅珠は無闇と恐れたりはしない。外法士は術を行使するために道具を持ち出した。それは彼の使用する外法が、道具を媒介にした術であることを示す。つまり、道具を破壊すれば彼の術は作動しないのである。加えて見たところ彼は体術に優れているとは思えない。つまり道具さえ破壊してしまえば、紅珠には他に恐れることはないということなのである。

外法士は痛みにのけぞり倒れこもうとする。紅珠は素早く立ち上がり、僅かに刀を握る手を持ち直し、返す刀で宙に舞う法具を狙つた。しかし一瞬遅く、法具は外法士の腕に捕らえられ、そのまま倒れこんだ彼はそれを庇うように抱え込み、蹲つた。紅珠の刀が止まる。

「……諦める。お前に勝ち目はない。おとなしく捕らえられるがいい」紅珠が押された聲音で言つ。声の美しさは先と変わらないまま、ただその声に宿る威厳が段違いであつた。常人であれば反抗する気力を無くしそうなほどに。しかし外法に身心を捧げた術士は簡単にその威には屈しないようであつた。陰惨な呪いの言葉がその唇から漏らされる。

「おのれおのれおのれ……よくもこの……」

ぶつぶつと呟きながら動かすのも辛いであろう腕で、それでもなお法具を庇おうとする外法士の様子に、紅珠は眉を顰める。

(完全に破壊しないと駄目か…?)

苦い顔で紅珠は外法士に近づこうとした。するとその気配を察したのか、地面に蹲つていた外法士がぱっと顔を起こし、血走った目で紅珠を睨みつけた。そしてその泥に汚れた唇から激しい言葉が吐き

出される。

「寄るなあ！－これ以上いいよつてさせぬ……」の、マイマイコ様のお骨にはこれ以上指一本毛の一筋とて触れさせぬわあ－－－！」

(…執念だのう)

その様子を少し離れたところで見守っていた嵐が、半ば呆れ、半ば感心しながらそんなことを思つ。少し離れた場所にいても、紅珠の威圧感を嵐も感じる。熟練した戦士の威は、相対するだけで全身の動きを封じられるような思いを、相手に与えるものである。『威に打たれる』といつやつである。しかし外法士は、確かにその威厳に押されてはいるものの、しかしまだ屈してはいない。紅珠の刀によつて碎かれた手の傷は相当な痛みを彼にもたらしているであろうに、その精神力は大したものである。その精神力の因るものが外道な術であるということさえなれば、である。

(しかし既に勝敗は決しておる…後は…)

三眼飛鼠どもをこの世に呼び出した術をどうにかしなければならなり。

(恐らくあの外法士は術士。ならばその術も道具を媒体としたものであろう。あの洞窟の中、か…)

そこまで考えたとき、嵐は紅珠の様子に気がついた。

「…紅珠？」

紅珠の様子が少しおかしかつた。嵐のいるところからでははつきりとその表情は見えなかつたが、なんとなく全身が緊張しているようく見える。その動きも止まっている。どうした。声をかけようとして、嵐は危険の気配を感じた。素早く動かした視界の陰に、洞窟から飛び出そうとする影が映る。

「紅珠！避ける！」

嵐の鋭い声に、はつと紅珠が反応した。その視界に、洞窟から飛び出してきた人影が映る。その両手が何らかの印を結んでいるのを察する。反射的に彼女の体が動いていた。

「死ね……」

洞窟から飛び出してきた男が叫びつつ、印を結んだ腕を突き出す。その両手から雷撃が迸り、紅珠を襲つた。

「……っ……」

「紅珠……」

眩しい光が炸裂する。紅珠の体が声もなく吹っ飛ばされる。そのまま転がって、嵐の立っている近くの木の根元にぶつかり、止まる。

「紅珠……」

嵐が名を呼びながら紅珠のもとに駆け寄る。紅珠が腕を突いて身を起こす。

「大丈夫か」

「……平気。とっさに防御したから」

紅珠が眉を顰めながら答える。確かに至近距離で雷撃を受けたにしては、見たところさほどどの傷を負っていない。それでも完全に攻撃をかわすことはできなかつたようで、紅珠の表情は険しい。

「防御と言つて……」

言いつつ、嵐は紅珠が両の手に刀を握っていることに気付く。その刀身に微かな光を放つ文字がぼんやりと浮き上がつていた。

「……護り刀です」

嵐の視線に気付いた紅珠がその無言の問いに答える。そのままぶるぶると頭を振ると、きつと顔を上げる。その先に再び印を結ぼうとするもう一人の外法士の姿があつた。

「そなたら下賤の身が我らの神マイニユ様のお骨に触れようとするなど、その罪万死に値するわ……！」

（マイニユ……………！）

紅珠の肩がぴくっと震える。刀を握る手が一瞬、強張る。

（馬鹿な……………！）

己を叱咤して身体を動かそうとする紅珠の前に、嵐が立つた。

再び雷撃が襲い掛かる。しかしそれは嵐が構えた杖の先で弾かれ、消える。

「大丈夫か？」

嵐が紅珠の顔を覗き込む。その心配そうな表情に、紅珠は苦笑した。

「…大丈夫」

そう、自分は大丈夫だ、と紅珠は心の中で言い聞かせる。嵐はそんな彼女の表情をじっと見つめる。そして一瞬間をあいて、穏やかな声で喋りだす。

「恐らくやつらの外法の術は洞窟の中で行なわれてある。恐らくそれは香と笛の音によるものだ」

「…香？」

「そうだ。今もう一人が出てきたとき、香の匂いが一瞬濃くなつた。今もやつらの衣から香が漂つてきておる。もちろんその他にも道具はあるうが、その一つをどうにかすればあるいは…」

「…とにかく、洞窟の中に入れればいいことですね」

紅珠の声に力が戻つているのを感じて、嵐は安堵する。先ほど僅かに感じた緊張の気配ももう感じられない。さすがは修羅場を潜つてきた戦士だと、嵐は思う。

「何を」「ちや」「ちや抜かしておる…！」

再び外法士が叫び、印を構えようとする。あまり能力の高い術士でなくてよかつた、と紅珠は思い、立ち上がつた。その肩に何かが触れる。紅珠が振り返ると、紅珠と一緒に立ち上がつた嵐が、その杖で紅珠に触れていた。

「おぬしに結界を張る。邪なものからおぬしの身を護る。おぬしの心の強さなら、当分大丈夫であろう」

僅かに目を見張る紅珠に、嵐が笑いかけた。

「頼むぞ」

その笑顔を少しの間見つめてから、紅珠は頷いた。そして次の瞬間、洞窟へと向かって飛び出す。その紅珠に雷撃が襲い掛かる。紅珠は両手の刀を目の前で交差させ、そこに精神を集中させる。刀身に微かな光を放つ文字が浮かび、すぐに刀全体を仄かな光が覆う。その光が襲い掛かる雷撃を受け止め、そして打ち消す。そのまま紅珠の

刀が驚きに目を見張る外法士に振り下ろされた。両肩を切りつけられた外法士が耳障りな悲鳴を上げて倒れこむ。それには既に一警もくれず、紅珠は洞窟内に駆け込んだ。

それは洞窟内を暫く進んだところにあった。油皿の火影に仄かに照らされた洞窟内の房の真ん中に壇が組まれ、その上にもくもくと煙を吐き出す香炉のようなものが据えられ、その側には一本の笛がきちんと台に捧げられる形で置かれていた。

房内は足の踏み場もないほど乱雑に散らかっていた。巻子や木切れ、竹巻、獸皮紙らしきもの、筆や墨壺、その他用途のよくわからぬ雑多なものや箱や桶、器、どうどろした液体の満たされた壺や鍋のようなもの、薬草らしき乾燥した木や草、そして

(…うつ)

思わず紅珠は口許を押さえた。その視線の先には山と詰まれた鳥や獸の死骸　とりわけ翼のあるものや蝙蝠、鼠や兔といった小動物が多かつたが　があった。

「…これが奴らの外法の正体か」

紅珠は指の隙間から息を吐き出しながら溜息を吐くように呟いた。紅珠は傭兵であるから、人間や動物の死体を見るのは慣れている。しかしそれでもこれだけの数の死骸を見るのは不快だし、気味が悪かつた。

紅珠は当然外法などというものは知らないし、知りたいと思ったこともないが、噂には聞いたことがある。外法の術の中には生物の身体を思うように作り直す方法や、反魂法というように死んだ肉体に別の魂を宿す術があるということを。恐らくこの場で行なわれていたのはそういうた術ではないだろうか、そう紅珠は判断した。

「全く不愉快だ」

ぼそりと紅珠が呟く。その声音には隠しようもない不快感と憤りが溢れている。その感情のまま、紅珠は刀を振り下ろした。

壇上の香炉が、笛が、打ち碎かれた。紅珠は何度も刀を振り下ろし、原形を留めないほどにそれらを打ち碎いた。

洞窟を出た紅珠は、嵐の姿を見つけ、そちらへ向かった。その足音に気付いて、嵐が顔を上げる。

「終わったようだのう」

「ええ。奴らの外法の道具は破壊してきました。念を押す必要はあるかもしけないけどとりあえずは大丈夫でしょう……それで、奴らは？」

言いつつ、紅珠の視線は地面に横たわる一いつの黒い姿を捉えていた。その下から滲むどす黒い血も。

「…死にましたか」

それは問い合わせであり確認でもあった。嵐は頷く。その表情は限りなく苦い。

「どうやら毒物を仕込んでおったらしい。手当てをする暇もなかつた。迂闊だったのう」

彼らの行動は予想の範囲内ではあった。しかし予想していくても間に合わないことはある。わかっていて、それでも嵐は苦い思いを禁じえない。これで背後のこと追求する機会も失われてしまった。書簡や彼らの持ち物から推測することは可能であろうが、それはあくまで推測であり、眞実に到達するのは困難なことになろう。それには

（むざと命を散らすこともあるまいに…）

そんな嵐に、紅珠が穏やかな声をかける。

「外法の徒は事実が露見することを極端に恐れ、禁忌とします。どんなにそれを阻もうと手段を尽くすとも、どんな方法をもってしても自ら死を選び口を封ずることです。それは既に我々にはどうしようもないこと……気に病むことはありません」

恐らく自分が口にすることなどこの人は知っているであろう、と

紅珠は思つ。それでも納得しかねる様子の人に、その心を痛めてほしくない、と そう思った。

嵐はふうっと息をつくと、立ち上がった。

「戻るとするかのう。後のことばは木峯露の者に任せればよいである

う

その表情には既に屈託の色はなかつた 少なくとも見えるところには。紅珠は穏やかな視線でその表情を見つめ、頷いた。

嵐と紅珠の二人が禾峯露の街に戻った頃には、既に村では怪異が治まっていた。街の者たちの言によると、蝙蝠 それが三眼飛鼠という幻獣であるということは、街の主だった者と戦士たちだけには知らされたが は急に何かに打たれたように動きを止め、そして地面に落ちて動かなくなつたという。恐らくそれは術が切れたためであろう、と嵐や紅珠は判断した。それらは既に蘇生する様子はない、完全な死骸になっていた。もう心配することはない、と彼らは不安げな人々に告げ、安心させた。

事件の詳細は、街の主だった者と戦士たちにだけは知らされた。そしてそこから先の判断は彼らに任せられた。なんといつても事件の犯人である外法士二人は既に命を落としており、その死体も確認された。それ以上のことは嵐や紅珠が立ち入らなくては彼らに処理できるであろう。

嵐と紅珠は当然のことながら感謝され、是非お礼をさせて欲しいと言われた。紅珠には特に不足しているものはなかつたが、嵐はしつかり遠慮なく礼を受け取つたらしい。それでは紅珠も全く固辞するというわけにはいかない。結局紅珠も僅かばかりの謝礼を受け取ることになった。

街では日が暮れるまで後片付けに追われた。そしてそれもほぼ終わり、日が落ちた頃には、人々の日常の生活が戻っていた。家々の窓には暖かな灯が点り、煙突からはゆっくりと夕餉の支度の煙が立ち上っていた。

嵐は『棗の木』で夕食を摂っていた。陽気な店主はその夜は一層陽気で、客に愛想を振り撒いて回っていた。ジョッキを持って客の

間を回り、乾杯して回っていた店主が、カウンターの嵐の側にやつてきた。

「やあ、お客さん、呑んでますか？ 今夜はいい日ですからねえ、楽しまなきゃいけませんよ！ わたし、飲みましょ、飲みましょ！」
やけに景気のいい店主の様子に苦笑しつつ、嵐はコップを店主のジョッキと触れ合わせ、飲み干した。店主が笑つて、カウンターの中の店員に声をかける。

「おおい、このお客さんにお酒を差し上げて」

「いや、わしはもう…」

嵐がそれを遮るうとする。今回の件で謝礼をもらつたとはいえ、懐具合はそんなにいいわけではないのだ。今後のことを考えればそんなに一気に大盤振る舞いするわけにはいかない。しかし店主は嵐を振り返り、手を振りながら気にすることはないですよ、と言つた。

「これは私からのおごりです。お気になさらず飲んでください…それともお酒はお嫌いですか？」

嵐がそんなことはない、と頭を振ると、店主は満足げに笑つて改めて店員に指示をする。おごりならいいか、と嵐はありがたくその厚意を受けることにした。

「それにしても店主よ、こここの飯は皿いのう。魚肉抜きでここまで旨い飯を作れる店はなかなかないであろう」

嵐の言葉に、店主が相好を崩した。

「いやあ、お褒めにあずかりありがとうござります。しかし肉も魚も召し上がるといふのには何か訳があるのですか？」

「いや、大した理由ではない。ただ、どうにもあるの生臭さが駄目なのだよ。もう長いこと喰つておらんから既に体が受け付けぬしのうからからと笑うと、嵐はくいっとグラスを傾けた。嵐の豪快のみつぶりが嬉しかったのか、店主も大口を開けて笑い、ジョッキを空けた。

「…それでも、いいのか？こんなに大盤振る舞いをして」

嵐が異様な盛り上がりをみせる店内にちらつと皿をやりながら言

う。

「いやいや、たまにはいいでしょう。人間、時には発散しないとやつてられませんからな」

「店長は普段すつこにしまり屋ですからね。時にはいいんじゃないですか？皆も喜びますし」

カウンターの中で忙しく調理をしている店員が言って悪戯っぽく笑つた。

「…それに、今田のような田はこうやって騒いで嫌なことは忘れてしまってになりますからな」

やや神妙な顔で店主がぽつりと言つた。嵐は店主の顔を見直した。
「幸い死人は出ませなんだが、嫌な事件でしたからなあ。恐怖や不安は楽しいことで忘れるのが一番です。それでこそ、私たちはこの土地で暮していけるのですからねえ」

「…そうだのう」

嵐は頷き、静かに笑つた。

乾いた砂の土地で、乏しい土地で、時にはならず者に襲われる辺境の街。このしたたかさと柔軟さがあつてこそ、生活が成り立つのである。それは間違いなく無法地帯との境、フロンティアで暮らす人々の強さであり明るさであった。

「今日は本当にありがとうございました。楽しんでいってくださいね」

店主はそう言い、再び密の中に戻つていった。

「そういうえば紅珠さん、今夜は見えないです」

カウンターの中の店員が誰にもなく言つた。その言葉に嵐は改めて店内を見回した。確かに紅珠はその中にいなかつた。いかに店内が客でいっぱいであるとも、あの田立つ美貌が目につかないわけはなかつた。

「あああ、残念だなあ。悪党をやつつけたときのこと、詳しく述べたかったのになあ」

嵐の隣で酒を呑んでいた若者がやや調子外れの声で言つた。随分酒が

回つてこひよつであつた。

「なあ、あんた、紅珠さんと一緒にいたんだろ？…どうだった？か
つこよかつただろう？」

陽気に酔つ払つている若者に詰め寄られ、嵐は苦笑するしかなかつた。

「ほんとにねえ、ほんと紅珠ちゃんが今夜はいつでやれって店
に連れてるんですよ」

崖大笑二

今回の事件はほとんど紅珠の働きによつて解決したのだということが、彼女に「同行」していた（ということになつてゐる）嵐が積極的に紅珠を讃めて回つてるので、すっかりその事実が定着しつつある。

に余る事件であつたし)

嵐は自分一人でも不可能だつたとは思わない。しかし厳しかつたのは確かであり、正直、紅珠が来てくれてよかつたと安堵している。（煽つてみた甲斐はあつたということか）

そんなことを思い、嵐は一人くすくすと笑みを洩らした。

たらふく食事と酒を馳走になり、ついでにかなり酔っ払った店主から土産だと酒の満たされた皮の水筒までもらつた嵐が『棗の木』を後にした頃には、かなり夜も更け、ほとんどの民家の明かりは落

とされていた。広場に焚かれた火の側で数人が酒を酌み交わし談笑していたり、遠くで賑やかな歌声が聞こえたりもしていたが、街には大分夜の静けさが下りつつあった。

ぶらぶらと宿への道を辿っていた嵐は、ついでに散歩でもしてみようかと適当に道を外れた。ちなみに今夜の嵐の酒量はほぼ同じペースで飲んでいたカウンター客一人が酔いつぶれ、それよりもかなりおさえたペースで呑んでいた店員一人に強制的に休息を必要とするものであつたが、本人の様子にはほとんど変化はなく、足取りもしつかりとしていた。

裏通りをぶらぶらと歩いていた嵐は、大きな木の根元に人影を見つけて立ち止まつた。月影に照らされて夜闇に白く浮かび上がる整った顔に艶やかな長い黒髪。

「なんだおぬし、こんなところにおつたのか」

嵐が声をかけると驚いたようにその人影が振り向いた。そして嵐の姿を捉えて、ぱちぱちと瞬きをした。

「あなたこそ。どうしてこのよつなところにいるのです？」

「いや、わしは偶然だ。ちと宿に戻る前に歩いて帰ろうと思つてのう。月もきれいだし。

それにしても今夜の主役がこんなところで一人月見酒か？紅珠「にこにこと笑いかけながら嵐が紅珠のいる木の根元に歩み寄る。紅珠は手にしたグラスと側に置いた料理を盛つた皿に目をやり、微かに笑つた。

「別にそんな洒落たものじゃないです。宿のおかみさんの作るご飯は結構おいしいんですよ。それに……」

紅珠の笑みが苦笑に変わる。

「…宿ではどうにも騒がしくて落ち着いて食べれませんのでね。まったく誰かさんのお陰で…」

「よいではないか。嘘ではないのだし。そろそろ、『棗の木』の店主もおぬしを待つておつたぞ。今夜なら酒が呑み放題だそうだ。ファンもおぬしを探しておるようだつたがのう

軽く恨めしげな目付きで睨んでくる紅珠に、嵐は飄々と答える。紅珠はやれやれといったように小さく息を吐いた。

「まったく大した狸ですこと。私もとんでもない人と係わり合いになってしまったものだ」

相変わらず紅珠の口は悪い。しかしその言葉にはほとんど棘がなくなっている。

「お互い様であろう」

だから嵐の口調にも棘はない。ぼてぼてと歩み寄った嵐は、紅珠の側にどつかりと腰を下ろした。

「まあ、ちょうどよい」ところで会った。『棗の木』の店主が土産をくれたのだ。わし一人では多いからおぬしにもくれてやる」

嵐が『棗の木』の店主からもらった皮の水筒を差し出した。中にはたっぷりと酒が満たされている。これから旅にも必要なものとはいえ、確かに一人で持ち歩くには少々多いようである。紅珠はでは一杯だけ、とグラスに酒を受けた。

暫く二人は取り留めのないことを話していた。主に話しているのは嵐であり紅珠はどちらかといつと聞き役であったが、どうもそれが自然な成り行きのようであった。

「…ところで少し、訊きたいことがあったのですけど」

話が途切れたとき、ふと、というふうに紅珠が口を開いた。ん？
とこうように嵐が視線を向ける。

「あのとき…外法士たちが自決したときのことですけどね」

嵐が僅かに眉を寄せた。紅珠はできるだけさりげないふうに言葉を継ぐ。

「あなた、あのとき彼らを助けようとなさつてましたね」

「…死なせては厄介であろうと思つたのでな。事情も訊けなくなってしまふし責任をとらせることもできぬ。…まあ結局は何もできんかったが」

「…それだけですか？」

紅珠が真っ直ぐ嵐を見つめる。その視線の揺るぎ無い色に、嵐が僅かに視線を逸らす。

「あなたは本当に、助けたいと思つていたでしょ？・彼らの命を助けたいと、そう思つていたのでしょうか？」 打算抜き元

紅珠は淡々とした口調で続ける。

「何故ですか？」

「と言われても、のう」

嵐がぽりぽりと頭を搔く。彼らしくもなく些か動搖しているようである。紅珠の口調が淡々としたものであることも、彼の居心地を悪くしていいるようである。

「理由を言えといつのなら、理由などない、と言つしかない、のう…」

そこで一皿口を開いたとして酒を一口含み、ゆっくり視線を上げる。

「助けたい、と思つた。命を捨てる事はない」 それだけだのう

言って、嵐は肩を竦めた。

「何も考えておらぬよ。結局な

「…甘いですねえ、やつぱり」

紅珠の口調は相変わらずあっさりとしている。

「……おぬし、今まで生きてきて何人敵をつくった？」

「さあ？」

それでも嫌味を感じないのは、紅珠には含むものがいるからなのである。と嵐は思う。彼女の言葉には嘘はない。正直、というには一筋縄ではいかないが、求めて人を傷つけようとか誑かそうといふことはないのである。彼女は確固とした自分の信念を持つていて、それに正直に生きている。ただそれだけのことなのだろう、そういう嵐は感じた。嫌いでは、なかつた。

「甘いかのう？」

少し間をおいて会話が続けられる。

「ええ、甘いですね」

紅珠も静かに返す。

「そんなに甘くては生きていけないですよ。」この世界

「それでもそう生きていきたいのう、わしは」

紅珠がじつと正面から嵐の瞳を見据える。嵐も臆することなくその視線を見返した。月影の下、紅珠の瞳がきらきらと光って、きれいだな、と嵐は思った。

（ああ、紫色だったのだな）

ぼんやりとそんな考えが頭をよぎる。ふと紅珠が目を伏せた。

「…あなた、いつか死にますよ」

（…だからそういう断言はよせと言つて）

がく、と力が抜けそうになる。

「でも」

嵐が思わず突っ伏しそうになる前に、紅珠の言葉が続いた。

「あなたは、それでいいのかも、しれない」

一瞬、沈黙が下りる。どこか遠くの歌声が聞こえてくる。嵐の縁^ヒ
玉石色の瞳^{メラルド}と紅珠の紫水晶色^{アメシスト}の瞳とが月に照らされ、視線が重なる。

「…いつ、発つのですか？」

ややあって、紅珠が僅かに瞳を伏せて尋ねた。

「明日…もう今日になるのう。早朝、陽が昇る頃には発つよ。」「どちらへ？」

「東へ」

「何をしに？」

その言葉にふと嵐の表情が変わった。

「星を墮としに」

紅珠が目を上げた。

「…多分、命を賭けるよ」

嵐の言葉はとても静かに紅珠の耳に響いた。静かで、力強い響き。嵐の瞳に宿る光が強まつたように紅珠は感じて、一つ瞬きをした。

再び沈黙が下りる。それを破ったのはやはり紅珠の言葉であった。
「明日は早く発つた方がいいですよ。明日も変わらず天気が良いようですから。昼までには水飲み場に着くようにした方がいいです」
嵐が頷いた。既に表情は元に戻っている。外見に相応しい悪戯っぽい笑み。

「おぬしはいつ発つのだ?」

「私はもう少し後になるでしょ?」

ゆっくりと紅珠が目を上げ、ふわりと微笑んだ。

「お気をつけて」

「おぬしもな」

それを合図としたように、嵐は立ち上がった。一つ手を振つて歩き去る嵐の後姿を、紅珠は木にもたれて見送っていた。

翌朝、地平線に赤い光が満ちる頃、禾峯露を出る旅人たちの中に嵐の姿があった。

乾いた大地に風が吹き始める。ゆっくりとその中に踏み出して、嵐は歩き始めた。

1
・始まりの風・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9102d/>

風都紅塵戦奇譚 一．始まりの風

2010年10月10日05時13分発行